

スエちゃんの牛頸ばなし



平成 21 年（2009 年）2 月、牛頸を中心に 200
～500 基もある須恵器の窯跡が国の史跡に指定さ
れました。スエちゃんは須恵器のつぼをイメージ
した牛頸区のキャラクターとして平成 15 年（20
03 年）にデビューしました。

皆さんどうか僕をよろしくお願いします。

製作者：竹田 準

作者 竹田 準

目次

第一回	牛頸といふところ	(平成一九年二月一日) . . . 4	ページ
第二回	なぜ「うしくび」?	(平成一九年三月一日) . . . 4	
第三回	牛頸今昔・その一	(平成一九年四月一日) . . . 4	
第四回	牛頸今昔・その二	(平成一九年五月一日) . . . 5	
第五回	牛頸今昔・その三	(平成一九年六月一日) . . . 5	
第六回	牛頸今昔・その四	(平成一九年七月一日) . . . 6	
第七回	牛頸今昔・その五	(平成一九年八月一日) . . . 6	
第八回	牛頸今昔・その六	(平成一九年九月一日) . . . 6	
第九回	牛頸今昔・その七	(平成一九年十月一日) . . . 7	
第十回	牛頸今昔・その八	(平成一九年十一月一日) . . . 7	
第十一回	牛頸今昔・その九	(平成一九年十二月一日) . . . 8	
第十二回	昔の牛頸の正月	(平成二十年一月一日) . . . 8	
第十三回	牛頸今昔・その十	(平成二十年二月一日) . . . 9	
第十四回	牛頸今昔・その十一	(平成二十年三月一日) . . . 9	
第十五回	牛頸今昔・その十二	(平成二十年四月一日) . . . 9	
第十六回	牛頸今昔・その十三	(平成二十年五月一日) . . . 10	
第十七回	牛頸今昔・その十四	(平成二十年六月一日) . . . 10	
第十八回	牛頸今昔・その十五	(平成二十年七月一日) . . . 11	
第十九回	牛頸今昔・その十六	(平成二十年八月一日) . . . 11	
第二十回	牛頸今昔・その十七	(平成二十年九月一日) . . . 12	
第二十一回	牛頸今昔・その十八	(平成二十年十月一日) . . . 12	
第二十二回	牛頸今昔・その十九	(平成二十年十一月一日) . . . 13	
第二十三回	牛頸今昔・最終回	(平成二十年十二月一日) . . . 13	
第二十四回	牛頸の正月一	(平成二十一年一月一日) . . . 14	
第二十五回	牛頸の正月二	(平成二十一年二月一日) . . . 14	
第二十六回	ほんげんぎよう	(平成二十一年三月一日) . . . 15	
第二十七回	モグラ打ち	(平成二十一年四月一日) . . . 15	
第二十八回	春の行事	(平成二十一年五月一日) . . . 16	
第二十九回	初夏の行事	(平成二十一年六月一日) . . . 16	
第三十回	夏の行事	(平成二十一年七月一日) . . . 16	
第三十一回	真夏の行事一	(平成二十一年八月一日) . . . 17	
第三十二回	真夏の行事二	(平成二十一年九月一日) . . . 17	
第三十三回	秋の行事一	(平成二十一年十月一日) . . . 18	
第三十四回	秋の行事二	(平成二十一年十一月一日) . . . 18	

第三十五回	秋の行事三	(平成二二年十二月一日)	19
第三十六回	平野神社1	(平成二二年一月一日)	19
第三十七回	平野神社2	(平成二二年二月一日)	20
第三十八回	平野神社3	(平成二二年三月一日)	20
第三十九回	平野神社4	(平成二二年四月一日)	21
第四十回	平野神社5	(平成二二年五月一日)	21
第四十一回	牛頸千軒七ヶ寺七浦	(平成二二年六月一日)	22
第四十二回	須恵器は牛頸の誇り	(平成二二年七月一日)	22
第四十三回	あゝ壮烈、不動城	(平成二二年八月一日)	23
第四十四回	牛頸村を救った次郎太	(平成二二年九月一日)	23
第四十五回	牛頸の功労者	(平成二二年十月一日)	24
第四十六回	牛頸村の庄屋さん	(平成二二年十一月一日)	25
第四十七回	命がけの牛頸用水路	(平成二二年十二月一日)	26
第四十八回	四王寺山の毘沙門天様参り <small>びしゃもんでん</small>	(平成二三年一月一日)	26
第四十九回	牛頸の道今昔(その一)	(平成二三年二月一日)	27
第五十回	牛頸の道今昔(その二)	(平成二三年三月一日)	28
第五十一回	牛頸の道今昔(その三)	(平成二三年四月一日)	29
第五十二回	牛頸の道今昔(その四)	(平成二三年五月一日)	29
第五十三回	牛頸の道しるべ <small>さるたひこしん こうしん</small>	(平成二三年六月一日)	30
第五十四回	猿田彦神と庚申塔	(平成二三年七月一日)	31
第五十五回	庚申について	(平成二三年八月一日)	31
第五十六回	小さな神様たち(その一)	(平成二三年九月一日)	32
第五十七回	小さな神様たち(その二)	(平成二三年十月一日)	33
第五十八回	屋敷神	(平成二三年十一月一日)	34
第五十九回	紙芝居できました!	(平成二三年十二月一日)	35
第六十回	百歳を超えてな元気、森山翁(平成二四年一月一日)	(平成二四年一月一日)	36
第六十一回	古墳と古代の住居跡	(平成二四年二月一日)	36
第六十二回	昔のお店・その一	(平成二四年三月一日)	37
第六十三回	昔のお店・その二	(平成二四年四月一日)	38
第六十四回	牛頸村の水車・その一	(平成二四年五月一日)	39
第六十五回	牛頸村の水車・その二	(平成二四年六月一日)	39
第六十六回	昔の食べもの	(平成二四年七月一日)	40
第六十七回	牛頸村のデータ	(平成二四年八月一日)	41
第六十八回	今はなきあの行事・(一)	(平成二四年九月一日)	42
第六十九回	今はなきあの行事・(二)	(平成二四年十月一日)	43
第七十回	今はなきあの行事・(三)	(平成二四年十一月一日)	43
第七十一回	牛頸の学校 其一	(平成二四年十二月一日)	44
第七十二回	牛頸の学校 其二	(平成二五年一月一日)	45

第七十三回	牛頸の学校	その三	(平成二五年二月一日)	46
第七十四回	牛頸の民話	その一	(平成二五年三月一日)	47
第七十五回	牛頸の民話	その二	(平成二五年四月一日)	48
第七十六回	牛頸の民話	その三	(平成二五年五月一日)	48
第七十七回	牛頸の民話	その四	(平成二五年六月一日)	48
第七十八回	牛頸の民話	その五	(平成二五年七月一日)	49
第七十九回	牛頸の民話	その六	(平成二五年八月一日)	49
第八十回	牛頸の民話	その七	(平成二五年九月一日)	50
第八十一回	私の思い出	その一	(平成二五年十月一日)	50
第八十二回	私の思い出	その二	(平成二五年十一月一日)	51
第八十三回	私の思い出	その三	(平成二五年十二月一日)	52
スエちゃんのつぶやき			(平成二六年一月一日)	52

第一回 牛頸というところ

皆さんが住んでいる牛頸は、その地名が難しいばかりでなく、古代六世紀から九世紀前半頃まで須惠器すゑきという立派な土器が沢山焼かれた所で、日本三大須惠器窯跡群の一つです。そこでスエちゃんも牛頸のキラクターとして生まれたのです。その頃牛頸は「牛頸千軒七ヶ寺七浦」と言われ千軒程度の家と七寺、七集落が栄えていたそうです。七ヶ寺は大立寺・浄瑠璃寺他四つの場所が分かっています。七浦は月の浦・日の浦など小字名で今も残っています。でも、よそで良質の土器や磁器が作られるようになってからは次第に静かな純農村地帯として変わっていきました。当時の窯跡は牛頸には二百基以上あったとも言われ、その内の幾つかが発掘調査されました。平野中学校を建てる時発掘されたハセムシ窯跡は立派なものでした。今でも山裾や川でその破片が出てきます。

第二回 なぜ「うしくび」？

変てこな地名ですね。昔、牛を殺していた所だとか、牛の首が埋められたとか思いますよね。でもそれは考えすぎ福岡藩の儒者・貝原益軒が殿様の命令で筑前国内を廻って書いた「筑前国続風土記」牛頸村の所に「上村に低い山がありその形が牛の首を伸ばしたように見える。それで牛頸と名付けられ、その山は古野山と言う」と書いてあります。その山は堂の本の西にある山で、今では浄水場になっています。次に古代に須惠器を作る技術者が朝鮮半島の牛頭ソモリから渡ってきてここに住みついて故郷の名を村の名前にしたという説です。私はそれが正しいように思います。他に、六千年程前ここは海の入江であったと言われ、アイヌ語で入り江のことを「ウシ」と言うのでそれを採ったと言う説です。江戸時代には牛頭村と書かれたこともありましたが、ウシクビの地名は北陸や東北地方にもどう言う訳か沢山見られます。※堂の本は現在の牛頸二丁目です。

第三回 牛頸今昔・その一

「6千年程前ここは海の入江であった・・・」と前回述べましたが、牛頸は旧石器、縄文、弥生、大和、奈良時代に造られた遺跡や古墳、住居跡が沢山出土しています。五世紀頃牛頭ソモリから渡ってきた須惠器の技術者たちの指導で多量の土器が焼かれましたが、恐らくその人達が住みついて牛頭村と名付けたのでしょうか。それはいつ頃か明らかではありません。九〇五年に大宰府に菅原道真公の廟が建てられてからは、大宰府から糸島・唐津方面へ抜ける西海道の支路の途中にあった牛頸は、今では春日原ゴルフ場になってしまった那珂川町との境の梶原峠を越えて大勢の参詣人、商人、武士たちが牛頸を通

っていました。平野小正門前の花無尾けなしおの六地藏と梶原峠には茶店も出来ていたそうです。そして平田の峠では旅人から金品を奪う山賊もいたようです。

第四回 牛頸今昔・その二

話は少し戻りますが、牛頸の須恵器窯跡は約二百基、古墳は九ヶ所五十二基、住居跡は十ヶ所出土しています。その後須恵器生産が盛んな頃を中心に「牛頸千軒七ヶ寺七浦」の伝承にあるように大変繁栄していました。それからの村の様子は残されていませんが、一五八七年の秀吉の九州征伐の折に一五〇〇年頃に築かれて平野ハイツ入り口右にあった不動城が落城しています。戦には村人も狩り出され迷惑したことでしよう。徳川の世の中、江戸時代になると村も落ち着いて長閑な農村になりましたが、享保・天明・天保と続いた大飢饉の災害は牛頸村も免れることが出来なかつたようです。その中で享保九年（一七二四）竹田定直が福岡藩の儒者の勤めを終えて牛頸に戻り、平野宮の右に「笛塾」を開いて朱子学を教えています。塾は二十年間続き、その後は寺子屋となり更に明治七年（十一年とも）牛頸下等小学校へと引き継がれたとのことでした。

第五回 牛頸今昔・その三

江戸時代後期一八〇〇年頃の牛頸は戸数九五・人口四五六人・田五七町余・農業以外の人は商業三・大工一・木挽き（木をノコで切つて材木にする人）一・猟師十名牛馬は合わせて八七頭というデータが残っています。現在の牛頸区は二六八七戸、七四三四人ですからその変わりように驚きますね。但し昔の牛頸村は現在の近隣五区を合わせた大野城市の約半分のエリアでした。広々とした山と森、清らかな流れ、田園の中に点在する農家の佇まい……。元気に走り廻る子供たちの声に混じって牛や鶏ののんびりした鳴き声……。まるで桃源郷を見るようだったでしょう。明治四年廃藩置県によって筑前国御笠郡牛頸村は福岡県御笠郡牛頸村となり明治七年（一八七四・明治一年とも言われる）平野神社北側、現在ゲートボール場の所にあった寺小屋が牛頸下等小学校（三年制）として開校。当時先生は一名、生徒は男子一九名、女子二名だったそうです。

（注）1町は三〇〇〇坪又は一万平方メートル弱

第六回 牛頸今昔・その四

明治一三年（一八八〇）の福岡県地理全誌によると戸数二一九、人口六三〇、牛馬九〇、田四六町余、山林六四一町余、他に橋、池、山中の大岩、滝、お堂の数、産物が細かく記されていて酒三〇石、ハゼの実、菜種、鶏卵が二千個、ソバ二〇石、和紙原料、綿、タバコ、蜂蜜、ワラビなども取れていたことがわかります。中でも茯苓（ブクリョウ）という松の根元に生える球状の茸で利尿薬にするものが特産物として採れていたようです。村のレベルは上の上とあります。運送の便は悪いとなっています。それらの物資は主に二日市方面へ運ばれていたようです。約八〇年前に比べると戸数三四戸、人口は一七四名も増えています。逆に田は一町ほど減っていますね。産物を見ると、今のより遙かに多種に亘っていますが、当時は自給自足の時代であるし生活物資も違っていたでしょう。物納による租税も大変だったでしょうが、それらのデータをみると牛頸村の活気が目に見えるようです。 ※1町は10反・3000坪

第七回 牛頸今昔・その五

明治二十二年（一八八九）には現在の大野城市内にあった十一ヶ村と那珂郡井相田村の一部（雑餉隈）が合併して御笠郡大野村となり、七年後の明治二十九年御笠郡・那珂郡・席田郡が合併して筑紫郡となりました。その頃、牛頸にも駐在所が出来ましたが巡査は雑餉隈で仕事をしていました。

明治三十七年には日露戦争が始まって牛頸からも沢山の方が出征されました。明治四十二年にはお宮の南へ移っていた第二大野尋常小学校（牛頸小）は生徒数の増加で手狭になったため寺山（現在のサクラ公園）に新築移転しました。大正二年に国鉄水城駅が出来て少しは便利になりましたが、牛頸から駅までは大人の足でも淋しい田舎道を一時間程かかっていました。その頃の聞き取り調査では百七戸、その内訳は医師一・教員一・木挽一・大工二・左官一・石屋二・桶屋二・粉屋三・農業九十四と職種が多彩になっています。中でも粉屋は水車を使って穀物をのんびりと粉にしていました。終戦直後、平野橋のそばに大きな水車がゴットンゴットン廻っていたのを覚えています。

第八回 牛頸今昔・その六

大正七年中通りにあった駐在所がお宮の左側に移りました。そしてこの年牛頸に初めて電灯が点りました。今のようには明るいものでなくて恐らくワット数の小さい裸電球が淡くついたのでしょうか、村人はさぞ喜んだことでしょう。大正十二年には西鉄大牟田線が福岡・久留米間を走り始めました。昭和五年には第七代村長として上半頸の山上高太郎氏が就任、山上村長は昭和三十年には

大野町第二代町長もされてます。昭和十三年にはお宮の前から横峰の切通し（現南コミュニティの近く）を経て平田までの県道が拡張され、たまに通る車と馬車がすれ違い易くなったとのこと。昭和十六年十二月に太平洋戦争（大東亜戦争）が公布され、米は一日一人二合三勺、砂糖やマツチは配給制、一七年には衣料品は切符がないと買えなくなりました。戦時体制が敷かれ、耐乏生活が始まりました。

第九回 牛頸今昔・その七

戦争が激しくなると銃後の守りも軍の指令で一層厳しく徴兵前の若者も軍需工場に強制動員されたり、若い男は村に殆どいないので小学生も農家の手伝いをしたり勉強どころではない毎日でした。通学時は素足に下駄、ズボンのポケットも縫い合わされて手が冷たくても我慢しました。終戦前は街の方では毎日の食べ物も満足に口に入らなかったのですが、牛頸ではどうだったのでしょうか。「欲しがりません勝つまでは」のスローガンの下に皆よく耐えたと思います。昭和十九年頃に軍が牛頸へ上大利の丘陵に陣地を築いて福岡海岸からの米軍上陸に備えました。牛頸は幸い空襲を免れたのですが二十年六月十九日の福岡市大空襲は高い所からその様子がよく見えたそうです。八月十五日辛まかった大戦が終わりました。天皇陛下の終戦の詔勅で初めてその玉音（天皇のお声）を聞きました。それが悔しいのか嬉しいのか小六の私には理解出来ませんでした。

第十回 牛頸今昔・その八

それにしても昭和二十年広島と長崎に落とされた原爆は無差別大量殺戮に他なりません。これからも決して許すことができません。二十一年頃、外地から軍人、邦人の引揚げが始まり、新憲法も発布され復興の第一歩を踏み出しました。でも食糧事情が悪くて米穀通帳を提示して僅かな米を求め、肉は勿論砂糖など満足に手に入りません。闇物資が横行しましたが栄養失調の人が沢山いました。牛頸国民学校は、牛頸小学校と改称され新しく決められた学校教育法により教材不足ながらも児童たちは戦争に脅える事なく伸び伸びと勉強に打ち込めるようになりました。二十二年には大雨のため牛頸川が氾濫して上牛頸の法照寺が崩壊し九名の方が死亡しました。二十五年大野村は大野町となり、各区に公民館を設置、上・下牛頸区にも公民館が出来ました。二十七年には平田地区に電灯が点り牛頸区全部がやっと点灯しました。三十年秋には西鉄バスが博多駅まで開通しましたが、舗装されていない所が多く頭が天井にぶつかる位とび跳ねながら走っていました。

第十一回 牛頸今昔・その九

今回は、終戦後程ない私の中学生の頃の事を少し・・・その頃の未舗装の道は、車は殆ど通らず馬車が時々通るだけで両端と真ん中には草がはえていました。花崗岩の砂で白い道がお宮から横峰の先の切通しを超え、左手天狗の鞍掛けの松のすぐ先が三叉路（今の南ヶ丘四ツ角）で、その俣行くと平田を経て二日市へ行きました。三差路を左折すると右は田園、左は山があり、一本松、二本松などが淋しい道の左側に立っていました。上大利の伊藤店という雑貨店の所までは一軒の家もありません。店を過ぎると国鉄（今のJR）の蒸気機関車が走っているのが見え、その先の西鉄電車まで見通せました。その頃、牛頸からは通勤の方と学生を併せても五、六人、朝いつも一緒に駅まで行きましたが、帰りはばらばらなので暗くなると通る車も人もなく街灯のない真暗闇の中をぼんやり白く浮ぶ道を外れないようにひたすら辿りました。三叉路に来ると決まって狐がギャーツとかコーンと鳴いて恐くて堪りません。でも切通し（今の銀ずし・アシユラン付近）を過ぎると村の灯りが見えてほっとして足を早めました。

第十二回

あけましておめでとうございます。今年も私の拙文をよろしくお願いします。今回の牛頸今昔はお休みして「昔の牛頸の正月」の話です。

暮は忙しい！餅搗きは二十九日は搗かない。戸主は雑煮用に栗の枝で栗あい箸を沢山作る。竹の先に笹の葉をつけた箒で家の煤払いをする。障子を張り替え畳を叩く。二日市や雑餉隈に正月用品を買い出しに出かける。松の木を伐って来て梅や竹を添えて門松を立てる。藁を打ち、注連縄しめなわを作る。歳神を迎える準備が整ったら年越しそばを頂き、ほっとすると遠くのお寺から除夜の鐘がゴーン…という具合です。元旦の朝は皆早起きして、戸主は井戸水（若水）を汲みます。神棚に手を合わせて豊作と無病息災を祈り、家族揃って澄し汁にまる餅・カツオ菜・ブリなどの雑煮で祝います。古くは牛頸では雑煮を食べない家があったと言われ、その理由は分かりません。元旦にはカマドや風呂はお休みだから風呂に入らず、箒も休ませて掃除もしませんでした。夜になるとマス餅といつて四角の餅の上だけ焼いて黒豆をつけて食べました。

第十三回 牛頸今昔・その十

昭和三十年上牛頸の山上高太郎氏が第三代町長として就任、三十四年春日原ゴルフ場が開場して高松宮様が牛頸に来られました。同年公民館が現在地に建設され、有線放送も開始、翌年堂の本の竹田家古文書の一部が県の文化財に指定

され、今は県立図書館に寄託されています。三十六年には上・下牛頸が合併して牛頸区が発足、四十七年前のことです。また、その年には堂の本の八軒が焼失する大火があり、春日原から米軍の消防車も駆けつけてきました。

昭和三十九年東海道新幹線が開通し、東京オリンピックも開催、カラーテレビが馬鹿売れました。その頃の牛頸はのんびりした山里の村だったので、平野宮の裏山にブルドーザーが入り、牛頸最初の平野団地が造成されました。そこは雑木の山でお宮の奥には不気味な池もありました。その山は、私の家の向いで、いつも狸や狐がウロウロし、近くのジロちゃん店（牛頸唯一の森山酒店）のご主人が鉄砲で獲っていました。

この造成地を皮切りに牛頸は次々と開発の嵐が吹き荒れ、またたく間に福岡市のベッドタウン化したのであります。

第十四回 牛頸今昔・その十一

牛頸子ども会は三十八年に知事表彰を受けたのに続き四十年には県教育功労賞、四十一年毎日新聞社から優良子ども会としてその活動と実績が称えられました。四十三年から六十二年にかけて下大利へ至る道の東側の広大な丘陵や畑が瞬く間に西鉄を主とした事業体が開発されて、南ヶ丘一区に続いて二区が造成され家並みはどうとう下大利から牛頸までほぼ続いてしまいました。四十四年には西鉄下大利駅へ南ヶ丘一丁目間にマイクロバスが走り、あの懐かしい有線放送も廃止されました。アポロ十一号が月面に軟着陸したのはこの年でした。四十六年牛頸小学校は南ヶ丘地区からの転入者が大幅に増えて手狭になったため閉校の已むなきに至り、南ヶ丘二区に大野南小学校が開校しました。牛頸小学校は明治十一年に平野宮横に創設され、場所と名称を幾度も変えながら九十一年間の長い幕を閉じた訳です。その後牛頸小学校跡は「さくら公園」として生まれ変わり、その入り口には当時の二宮金次郎の像が残され、春には昔と変わらず櫻が絢爛と咲き誇っております。

第十五回 牛頸今昔・その十二

昭和四十七年大野町は大野城市に変わりました。当時人口三六七五七人、市名は大野市とする案が出ましたが福井県に大野市があり、四王寺山（昔の大野山）にある朝鮮式山城に因んで大野城市となりました。

初代市長は森山幸雄氏。その頃南ヶ丘一区、二区共にかんりの住宅が建っていて南地区コミュニティセンターがさくら公園東隣に建ち、文化・体育施設も充実してきました、牛頸ダム建設のための調査も始り、四八年には南ヶ丘一区

と二区が牛頸区から分区しました。牛頸の西南に当る平野台も売り出しを開始。そこは牛頸の子供達がメジロ捕りや小鳥罾を仕掛けたりナバ（きのこ）取りなど山遊びに興じた貴重な山野でした。赤松の根元ではマツタケも採れ大人は獣を捕えるのに銃や罾を使っていました。川には大きな鮒が泳ぎ、ハヤは元よりドンポやカマツカも沢山捕れました。田圃の水路や小川ではドジョウなどが晩秋のおかずになる程捕れ、たまに鰻やツガニがとれると又とないご馳走でした。秋の稲田を歩くとイナゴがパラパラと跳び、殿様蛙と共に貴重な蛋白源になりました。

第十六回 牛頸今昔・その十三

南ヶ丘地区の住宅は勿論の事、沢山商店が建ち並び昭和四九年（一九七四）には郵便局に続いて銀行も開設されました。その後平野台町名変更・緑ヶ丘造成完了・つつじが丘町名誕生：福岡市のベッドタウンと化し、昔の緑豊かな面影が次々と失われてきました。一方、九州縦貫道（高速）が開通し、新幹線が博多まで開通しました。五二年横峰の北の高台に平野小学校が開校し牛頸在住の児童四七〇名が南小から入りました。校名については牛頸小とする案も出ましたが色々思惑があつて平野小となりました。牛頸から小学校が消えて六年目にして戻ってきました。この年牛頸ダムの建設計画が決定、昭和五三年待望の現牛頸公民館が完成しました。またお宮の左にあつた巡査駐在所が廃止され南ヶ丘派出所が出来ました。その頃は空巢・コソ泥などが少ない長閑な佇まいでした。現在の世相では区内にも交番が欲しいですね。またこの年には夏に千天続きのため七月～九月まで十時間断水があり、田圃も畑も人の喉もカラカラに渴きました。

第十七回 牛頸今昔・その十四

昭和五四年（一九七九）には大野城市の新庁舎が開庁、また大宰府市と共同で大野城環境処理センターが完成し運転を開始しました。大野南ママさんバレーが全国制覇を成し遂げ、その女性パワーが称賛されました。五五年には牛頸公民館が優良公民館として県の表彰を受けました。五六年平野中学校が開校され、それまで大利中に通っていた南ヶ丘一区、二区、牛頸区の生徒が分離して入校しました。建設工事の前に校舎敷地にかかるハセムシ窯跡の須恵器の中に和銅六年（七一三）に筑前国那珂郡の三人が当時の租税の『調』として納めたことを大甕かみにへらで書いたものが出土し、大変貴重な資料として市指定有形文化財になりました。昭和五八年には土地、道路、公園、施設などを有効利用するために牛頸土地区画整理事業が決定し、その対象区域は一〇一・六ヘクタールに

も及びました。同年の秋、第一回『おおの大文字まつり』が華々しく催されました。

昭和六〇年に国勢調査で市民は六九四三五人というデータが出ました。翌六一年県営牛頸ダムの起工式が行われました。

第十八回 牛頸今昔・その十五

六二年さくら公園の横に市の勤労者体育センターが完成、ここは後に南コミュニケーションセンターの体育館になります。

六三年には市消防第四分団（牛頸区）が第十一次全国消防操法大会で優良賞を獲得。この年青森県と北海道を結ぶ世界最長の青函海底トンネルが開通。そして六四年一月八日に昭和天皇が崩御され平成と改元されました。昭和天皇は一九二六年に天皇になられ史上最長の六四年間の在位でした。虎の門事件・昭和の恐慌・第二次大戦など多難な治世を送りましたが、一九四七年に日本国憲法によって象徴天皇とられました。

平成二年牛頸ダム完成の前に黒金山麓にいこいの森センターが着工。また、平野宮前から若草の方にかけて倉石土地区画整理事業が計画されました。三年には多目的のロックフィル式牛頸ダムが完成、周辺の景観が様変わりし、市民の憩いと健康作りの場となりました。同年平野台区が牛頸区から分区。いこいの森中央公園も完成し、広々とした芝生と遊具広場を備え、宝満山、四王寺山を見晴らす素敵な市民の公園になりました。

第十九回 牛頸今昔・その十六

話は戻りますが、終戦前後にかけては食べ物、着る物がなくて、親は子供を育てるのに大変苦労をしていました。その頃の牛頸は今よりずっと涼しい夏だったように思います。道端には木が生い茂り、田畑が広くて小川があちこちに流れ、家は少なく道は舗装されていなかったからでしょうか？その頃地球温暖化なんて誰も考えていなかったし、CO2も取るに足らぬ量だったのでしょう。スエちゃんから暑中見舞い申し上げます。

それはさておき

閑話休題：平成五年には牛頸から後藤市長が就任された。牛頸ダムの奥に「いこいの森」もオープンして翌六年にはダムの少し上の登山口からキャンプ場、黒金山を経由して牛頸山（四四七・九^分）に至る縦走路が完成し、低山ながら山深い趣のある素晴らしいコースは県内外でも人気絶頂のハイキングコースになりました。山道を辿って、帰りは牛頸林道を降りてくると、おおよそ四時間の健脚コースです。牛頸区では初冬にこのコースを歩く恒例行事にしています。皆さんどうぞご参加ください。平成七年には月の浦が新しく造成され、月の浦

区として牛頸区から分区しました。

第二十回 牛頸今昔・その十七

平成七年一月一七日あの阪神淡路大地震が起こり、六三〇〇人の死者、四万三千人の負傷者を出しました。滅多に地震がない福岡でも三年前の春に大地震がありましたね。皆さんは「福岡は地震のなかとバイ」と思っていたのでしょうか、これですっかりジンをなくしましたね。いつグラット来るかも知れませんが、事故があつてからグラグラこかんように地震対策をしておきましょう。牛頸川にはナマズも住んでいるとですよ。

この年さくら公園近くの薬師の杜が市の文化財に指定されました。こういう史蹟は皆で大切にしたいです。八年四月に平野小学校から月の浦小学校が分離して七一七名の児童が移って行きました。その年牛頸ホテル部会が環境保全に功があつたとして県から表彰されています。さて九年にはつつじヶ丘が分離して市内で二十六番目の区になりました。市のほぼ半分近くを占めていた牛頸は二十五年にして六つの区に分かれてしまいました。そして牛頸土地区画整理事業も完了、新しい道路や公園が出来てすっかり様相が変わりました。平野小学校と区との合同運動会が始まったのもこの年でした。

第二十一回 牛頸今昔・その十八

平成十一年八月の盆踊り大会で、西川孝雄さん作詞、山口三郎さん作曲の『牛頸音頭』が柴高洋子さん振付の踊りで発表されて喝采を博しました。この牛頸音頭は平野小との合同運動会や盆踊り大会など機会がある毎に、歌い踊られています。同時に竹田準氏考案の区のシンボルマークを染め抜いた法被はっぴも披露されました。この年区老人クラブ二組（現牛頸悠々会）が環境美化に功あつて県知事から表彰されました。倉石土地区画整理事業も完了して、町並みがすっきりし、生活の利便性が一段と向上しました。平野小学校では八女郡矢部小学校とインターネット姉妹校の調印を交わしました。十一年六月には、南地区コミュニティセンターが落成して地区市民の文化と教育・健康・福祉活動の拠点となりました。そして老人クラブ二組（悠々会）の地域美化運動が認められて環境庁から表彰されました。続いて消防第四分団（牛頸）が全国消防ポンプ操作大会小型ポンプの部で準優勝するという成果をあげました。九月、平野小がオーストラリアのアララト西小学校とテレビ会議での交流が始まり、IT時代にふさわ相応しい教育の幕開けとなりました。

第二十二回 牛頸今昔・その十九

平成十四年三月、五年間に亘る区の諸先輩や区民の協力で「牛頸郷土史」が発行され全世帯に配布されました。市内では初めてでこれを読めば牛頸の今昔全貌が解るといふ勝れものです。五年前には、「須恵器とホタルの里」を謳う区のキャラクターとして、スエちゃんが登場しました。同年六月には牛頸区歴史探訪の第一回が始まり、五十名近くの区民が参加、初夏の里山をガイドの説明で歩きました。翌六年一月には牛頸山歩きも催されました。山歩きの最初は林道歩きや牛頸山だけででしたが、最近ではいこいの森キャンプ場から黒金山三市町山・牛頸山・林道を辿る約四時間のコースに定着しています。このコースは某登山ガイドブックに紹介されて以来、近場では稀にみる素敵な縦走コースとして西鉄レッツハイクにも取り上げられるほど好評を博しています。

十七年四月、牛頸ダムのすぐ下、ホタル見物の所にホタル飼育場が完成。牛頸ホタル部会の皆さんは日々飼育に余念がありません。その功あって牛頸のホタルはシーズンになると新聞等で広報され、すっかり『牛頸はホタルの名所』となりました。

第二十三回 牛頸今昔・最終回

平成十八年区の世帯数が増加したため、公民館での集会時の収容能力や高齢者が足を運ぶには些か遠い等の問題点が増えて若草地区との分区案が浮上しました。本年八月現在の世帯数は二八一六、人口は七六六七名ですが、区と市とのコンセンサスも得られ、一九九九年三月第一回の分区検討委員会を持ち、七月末推進委員会と改称して以来数度の会議を開いた結果、大方の区民の了解を得て二〇〇四年四月の区総会で分区案が決議されました。分区までには今後多少の曲折があることでしょうが、いずれ分区は成立することとなります。さて、この牛頸今昔シリーズ、時の流れに沿って牛頸を大まかに振り返ってみました。が如何でしたでしょうか？中には「あげな事もあつたらうもん」とか「ありや間違うとるバイ」とかのご意見も御座います。そこは「どうかカンベンしてつかわさい」と逃げの一点張り：しかし未だに余所に比べても遜色のない豊かな緑と歴史と人情の「うしくび」を慈しむ心大切に皆さんと健やかに過ごしたいものです。次からは牛頸の古墳、行事、農事、習俗、食、方言などを逐時取り上げてみたいと思います。

第二十四回 牛頸の正月一

あけましておめでとーございます

スエちゃんは今年も頑張ります。先ずお目出たいニュース。去る十一月二十二日の新聞によると『国の文化審議会が牛頸須恵器窯跡を国の史跡にするよう答申したのを受け、市教委は「須恵器生産と流通を研究する上で貴重な遺跡として認められた」と歓迎している』と報道されました。国史跡の決定までは多少時間がかかるようですが牛頸にとっては知名度アップもさることながら大変喜ばしいことです。所で牛頸の正月：と言っても昔のことはいざ知らず、今では全国どこでも同じようなパターンになっているようです。牛頸独特の正月習慣は口伝くでん以外余り資料がありません。本来新年は歳神様を迎えて豊作を祈る行事です。昔風にやれば暮の十三日はスス払い、その後山あとから松を頂いて、梅と竹で以て門松を立てる。昔牛頸では家の軒先に届く位の松を立てる「若水迎え」をしました。正月のためにとっておいた稲藁をなつて、しめ縄やしめ飾りを作り、門口や神棚に張ります。片や餅搗き、二十五日から二十八日の間にペッタシコしましたが二十九日は九が苦に通じるので搗きませんでした。

第二十五回 牛頸の正月二

餅搗きを終えると山の栗の木の枝で雑煮を食べる時の「クリアイ箸」を家族の分作ります。女性陣は買い出しとお節せちつくりに大童わらわです。三十一日大晦日の夜はどの家でも今は同じ：紅白歌合戦を見たあとは年越しソバをすする傍ら「ゆく年くる年」を見つつ除夜の鐘を聞いて新年を迎えるという段取りです。その頃には平野神社は初詣での人達で行列ができています。人口が少なかった五十年程前は、お宮の初詣ではパラパラでしたが最近は大変な人出ですね。詣でたら御神酒を頂いてゲートボール場の大焚火で体を温め厄を拂います。家に戻って一眠りしたあとはいつもより早目に起きて、家族揃ってお屠蘇を飲んで一年の邪気を拂いクリアイ箸で雑煮を祝います。アゴや鶏がら昆布で取ったダシに丸餅、ブリの切り身、カツオ菜などを入れますが、基本的に博多雑煮にならっているようです。しかし牛頸では雑煮を祝わない家があったと伝えられています。その訳ははっきりしません。正月二日は仕事始めで男はナイゾメで菓子仕事、女は針仕事をしたようです。子供は書き初め、食事はおせちの残りもので福入り雑煮を作りました。

第二十六回 ほんげんぎよう

これから牛頸に伝わる主な行事や風習を少し続けます。全国的に行われている左義長とかとんど焼きはこの辺りでは「ほんげんぎよう」と言います。これは元々宮中で古い書類を焼いたのが始まりです。牛頸では昭和五十年迄は四ヶ所でやっていました。現在は牛頸字原の一ヶ所になりました。また、個人の家でも可愛いほんげんぎようをやっていました。焼く日は、今は

正月七日の夜、有志が近くの山から竹や木を伐って来て原の猿田彦大神の前の田に高く組み上げます。集まって来た人達は御神酒、スルメ、昆布を頂いて夕方火が付けられるのを待ちます。火は竹のはぜる音と共に夜空高く燃え、火の粉を飛ばして凄まじい勢いで燃えます。火が落ちついたら持つて来たしめ飾り・門松や餅を焼きます。カキゾメの紙はその灰が高く舞い上がる程、習字がうまくなると言われています。焼いた餅は家に持ち帰ってオニミソをつけて頂きます。味噌はほんげんぎょうの日まで使ってはいけません。その前に味噌を使うと所帯を持ち崩すと言われています。それだけに昔、味噌は大切な食べ物だったのですね。

第二十七回 モグラ打ち

正月十四日の夕方になると方々の家からバツタンバツタンという音と子供達の大きな声が聞こえてきます。モグラが屋敷近くの畑を荒らさぬ様に地面を叩いて脅して豊作を祈るのです。長い竹の先にワラをしっかり巻いて子供達が家の周りを『十四日のモグラ打ち、隣のカドさえもって行けドツスンバツタンと地面を叩きながら回ります。「もって行け」というのはモグラが土の中でトンネルを掘りながら隣のカド(門)まで行け!という事です。これは終戦後十年位迄やっていた様な記憶があります。昔は今ののように庭にレンガや敷石を敷いたりしていなかったもので、モグラは土の中でズシンズシンという音に慌てて退散したことでしよう。二つに折れた竹は柿や梅の木に引っかけて実が沢山成るようにと祈ります。

これは主に九州各地で行われている正月行事です。雑餉隈では『モグライッポ、カイイッポ、トナリノカダサエモツテイケ!』と言いました。関東北部でも似た様な行事があつて、棍棒上のワラ鉄砲で地面を叩きながら『とおかんや、とおかんや、晩飯食つたらぶつたたけ』と言ったようです。

第二十八回 春の行事

「初老の祝」 牛頸では春の彼岸に初老の祝をしました。長寿社会の現在、考えられない四十一歳の厄落としの事です。家で「厄落とし餅」を搗いたら平野神社に持つて行きました。白と黄の鏡餅で黄色の餅の中には四十一円を入れた初老の人はこの重ね餅を一人で近くの十字路に置いてゾウリを脱いで裸足で家まで走って帰りました。その間、人に出会ったりしてはいけなかったそうです。

「おせつたいひき」 毎年四月二十一日は弘法大師様の春まつり、今でも牛頸十ヶ所の大師堂で行われています。戦前は弘法大師信仰の霊場である篠栗八十八ヶ所巡拝をして来た人達を各集落で待ち受けて手作り料理で接待したのが今に

残っています。当日はお参りに来た子供達が袋菓子などと頂いて喜んで何カ所も回っていますが、高学年の子は自転車であつて山のようにお菓子を貰っています。今では子供達中心の祭りの慣わしになっています。なお、十ヶ所とは、井出（二ヶ所）、丸隈、原、大立寺、中通り、横峰、堂の本、月の浦、畑ヶ坂、平田ですが、中には弘法大師様をお祭りしていないお堂もあります。

第二十九回 初夏の行事

「お節句」 五月五日は男子の健やかな成長を祈る端午の節句。今では「子どもの日」の方が馴染みやすいですね。牛頸では、チマキを作るため山から笹の葉や衣振川（イブリ川・今の牛頸川）、平野小学校下のイガイ牟田池からショウブの葉を採ってきました。チマキは餅米の粉を練ってその葉で包んで蒸しました。出来上がったチマキは三本程をカチカチになるまで神棚にお供えます。今でも初節句の家では男の子の名前を幟に大きく染め、鯉のぼりと共に揚げ、座敷には金太郎や張子の虎を飾っています。

「さなぼり」 田植えは農家にとつては大事な作業です。牛頸ではお互いに親戚などの応援でテマガエ（手間換え）をする家もありました。そのため遠くまで手伝いに出かけることも多かったようです。今は田植え機で事もなく終わります。田植えが終わると近くの庚申や猿田彦の碑に残った苗を一握り供えて田植えが無事終わったお礼と秋の豊作を祈り、手伝い人の慰労を兼ね、かしわ飯やチラシ寿司を作ってサナボリをします。サナボリのサは神様のこと、ナボリはノボリが変化した語で、神がお上りになるの意味です。

第三十回 夏の行事

「およど」 平野宮一番の祭礼は七月十八日のおよどという夏祭りです。朝早くから夜店の準備が始まり、暮れ方には沢山のお店や提灯に明かりが灯り、参拝の人は浴衣掛けに団扇片手にやって来ます。八時には拝殿で祝詞があげられ境内は人で溢れます。昭和四十五年頃までは、人が溢れるという事はありませんでした。近くに団地が出来てから参拝者が激増したのです。

神社の世話人は各家庭にショウケ（竹菰）を持ってガメシバ饅頭（サルトリイバラの葉で包む）やタンサンの饅頭を貰いに行つて神様に供え、そのあと参詣の人達に配られていました。およどとは宵宮の事で、元々子供を主体にした夏越しの祭りです。前六ヶ月の穢れを拂い、後六ヶ月の健康を祈る行事です。余談ですが名古屋弁でヨダレのことをオヨドと言うそうです。

「夏ごもり」 およどの翌十九日は氏子総代約三十名全員で境内を掃き清め、拝

殿で神官に祝詞をあげて頂き、四時から直会に入り御神酒を頂いて弁当を食べます。これは前日のおよどの後片付けを兼ねた氏子総代の情報交換と親睦の場でもあります。

第三十一回 真夏の行事一

「雨乞い」 梅雨が明け、日照りが続いて田んぼの水が足らなくなると農家は大弱りです。昔の大野村の雨乞いは桧の枝やワラを束ねてリュウ（龍）を作り、中にクチナワ（蛇）を入れて荒神坊さんに拜んでもらってカネや太鼓を叩いて村内を担いで回り最後に四王寺山の鏡池に入れたそうです。牛頸では竹田家に江戸時代から伝わる虎の頭骨を紐でくくり平野宮の裏、今の牛頸三丁目にあった御池や龍華霊園そばの天ヶ獄霊場の下の滝しもに投げ込んで神主さんが雨乞いのお祈りをしたそうです。虎と龍はもともと仲が悪いので、虎が水に入ってくる、中の龍が怒って戦いとなり、突然雲がわいて雨が降る、と言う訳なのです。

「田ほめ」 七月七日になると農家の人たちは自分の田んぼに行って、お酒や牛頸の川でとったオシオイ（不浄をはらうための砂）をまきながら「ヨカオタネ」とか「ヨウデケタ」と唱えごとをして豊作を祈りました。そうしてこの日は田んぼの事は禁じられていました。また牛頸では、七月十五日（旧暦六月十五日）に田んぼに入って仕事をするとバケモノが出ると言われていました。

第三十二回 真夏の行事二

「お盆」 八月十三日から十五日は先祖の霊を迎えて家族と過ごします。先祖の霊は「おしよろさま」と呼ばれます。お盆前には墓掃除をし、十一日までに平野小学校そばのイガイムタ池や昔サクラ公園の近くにあった猫池にコモを刈りに行き、それを荒く裂いて乾かし二枚のむしろを編みました。一枚には先祖の位牌とお供え物を、もう一枚には無縁仏のためのお供え物を置きました。そして「迎えダゴ」を作り、十三日「迎え火」を焚いてチョウチンと線香を持ってお墓へ行き、お墓で線香に火をつけて道々線香を置きながら佛様を案内しました。その時こちらへどうぞ、ということ「コーゴザイ、コーゴザイ」と言います。十五日には佛様がお墓へ帰る時もチョウチンをつけて「コーゴザイ、コーゴザイ」と唱えます。そしてお供え物をコモに包んで川へ流す精霊送りを行います。

「盆づな」 昔大野村では盆綱引きが盛んでした。盆前に子ども達が山から採って来たカズラを大人が直径三十センチ長さ十メートル位の綱にして十五日上方と下方に分れて綱引きをします。綱を作る時引く時に「祝いめでた」を歌ったそうです。

第三十三回 秋の行事一

「虫封じ（田ほめ）」 旧暦八月一日頃行われていたようです。主にウンカという害虫の退治でした。田の水面に竹筒に入れた石油を少しづつまいて虫を殺していました。そして大宰府天満宮などから虫封じのお札を頂いて割竹の先に挟んで田の隅に立てて、「よか田んぼーよか田んぼーうちの田んぼはよか田んぼー」と皆で、はやしたそうです。戦後は農薬を使うのでこの行事はなくなりました。

「大行事」 九月五日には堂の本の西の西古野（今の浄水場）の南の小高くなつた所に巨大な松が数本立っていて、その下に土俵があり、近くに祭つてある牛馬の神「高皇産靈尊」の奉納相撲が行われていました。この日は近隣近在からも選手が参加し見物客も大変なものでした。横綱等の番付や弓取り式もあり賞品も出ました。相撲は赤ん坊から大人まで取りました。選手や見物客には「力めし」といって大きなオニギリが配られました。でも残念なことにケガ人が出たので中止となり、また、浄水場が出来たため高皇産靈尊と土俵も竜華霊園の入り口の高い所に移され、昭和五十二年からは九月の神事だけになってしまいました。望む復活！

第三十四回 秋の行事二

「芋名月」 旧暦八月の十五夜、各家ではサツマイモを蒸かして縁側に備え、お月見をしました。牛頸の子ども達はそのイモを家の人に黙って失敬して廻るといふ公然のスリルを楽しんでいました。

「おくんち」 十月十七日は牛頸のあちこちでおくんちをやっていました。確か昭和五十年頃からやっていないようです。これも新しい世帯が増えたとか時代の風潮でしょう。その日は一軒の家にカシワ飯やアズキご飯、ガメ煮など自慢の手料理をカサネ重に詰めて持ち寄り、賑やかな親睦の一時を過ごしました。そして牛頸名物でもある「ハナヨゴシダゴ」も出ました。これは米の粉で作った団子に汁気の少ないゼンザイをまぶしたようなダゴで、とても美味しくて鼻が汚れるのも構わずに食べたのでハナヨゴシダゴと言われています。（ああ食べたかア）

昔は牛頸小学校の運動会はおくんちの翌日に決まっていたそうです。どの家でも稲刈りが終わって一段落着いてホッとした息抜きの日でした。おくんちは旧暦の九月九日重陽の節句ちようように全国的に行われていました。菊の節句とも言われ「御九日」と書いてオクンチと読みました。

第三十五回 秋の行事三

「宮座」 宮座は全国的に行われている集落の祭祀組織で産土神うぶすなの氏子たちによって構成され、順番に定められる頭屋（とうや）を中心として豊作や幸せを神に感謝する行事です。平野神社では宮座株を持つ上牛頸六戸・下牛頸六戸計十二戸で毎年十月十六日から十七日の二日間行われます。十六日の夕方から当番の家に集まって餅つきをします。新米の「餅つき膳」を頂き、そのあと山で採った長さ約二呎の椎の木の両端の皮を削った杵で、口に榊の葉をくわえたまま皆で餅つきをします。そして座敷で本膳を頂きます。十七日は全員でお宮にお参りをし「献餞の儀」を行います。お供え物は御神酒・新米・甘酒・餅・大豆・鯛・大根・ホテ（固く束ねた大根葉に竹串に刺した渋柿二本・山芋二本・トコロ二本）二組など十二個を三方に乗せて、十二名の氏子が順に手渡しで神殿内に供えます。十七日夕刻には「撤餞の儀」が行われ、直会（ナオライ）をして終ります。宮座の費用は昔、春日市小倉にあった二反五畝の宮田で補っていました。大正の末に百円で売り、その後はその利子を使い、現在は宮座十二戸で分担をしています。

第三十六回 平野神社1

あけましておめでとうございます。この牛頸ばなしも三年目に突入しましたが、スエちゃんの話はまだ沢山残っています。フアイト！

牛頸で大切な所といえば矢張り平野神社です。たまに牛頸神社と言う方がいますが、そんなこと言ったら神罰が下りますぞ！ 所で平野神社の創建は確かな記録がありません。筑前国続風土記拾遺には『平野大明神、本村大立寺だいらむつじにあり産神なり祭神は仁徳天皇なり祭礼十月一九日此社鎮座のはじめ詳ならず。』とあり続いて後堀川院貞応元年十月（一二二二年）祈禱料として村内の田地二十四町、筵田部（板付・空港の辺）田七町、内志摩郡（糸島）田七町、肥前国田五町島六町、屋敷一、豊前国八十町が勅（天皇の命令）により寄付があり、大宰府貳資頼から観世音寺の権利当執行坊あてに「事務官理せよ」という文書が同寺に残されているようです。しかしお宮はそれ以前に鎮座していたようである、とも書かれています。又明治十三年の福岡県地理全誌では社寺二百十三坪、氏子二百二十六戸、末社は巖島神社、菅原神社、高木神社、志賀神社で共に社地にある。と書かれています。

第三十七回 平野神社2

いづくし 巖島神社は大楠の先にあります。菅原神社は現存する天神社でしょうか、高

木神社と志賀神社は今はありません。高木神社は高天原に出現したという高木神（高皇産靈神）、志賀神社は海の神様です。

戦後、神社は国の管理から解放されましたが、昭和二十七年の宗教法人法で「際神大鷦鷯尊（仁徳天皇）例祭十月十九日、境内は厳島神社（市杵島姫命）天神社（植山姫命）境内地五百七十三坪、氏子数百五十世帯」と登録されています。

まだ他に記録はありますが何れにも「縁起は定かではない」と書かれています。伝承では、西暦年間（九九〇〜九九四年）に創建されたと伝えられています。そして京都の平野神社から祭神を勧請（神佛の分霊を迎えて祭る）されたという同神社の証明書が拝殿に掲げられています。祭神仁徳天皇（中国や朝鮮との交流を盛んに行い租税を三年間免除、国民を深く慈しまれた）奥宮は拝殿裏山の頂に祀られています。傍らには、『高き屋にのぼりて見れば煙立つ、民のかまどはにぎはひにけり』という有名な御製の歌碑が建てられています。登ってご参拝下さい。

第三十八回 平野神社3

他の四神は今木神、久度神、古開神、比咩神です。今木神は渡来系の神、久度神はカマドの神、古開神は使い古した使用済カマドの神、比咩神は桓武天皇の生母・高野新笠です。高野新笠の父は百済武寧王の血筋の和乙継、母は大和国の土師真妹で新笠は光仁天皇の妃となって桓武天皇を生んだ方です。厳島神社は市杵島姫命を祀り農耕に欠かせない水の神、天神社の神は植山媛命であり土器の神ですが何故か祠の正面の梅鉢の紋は菅原道真公の紋で、二神を祀っているのでしょうか。道真公の祖先は土器製造担当の土師氏です。この社は田の神様として祀り始められたようです。以上整理すると仁徳天皇は朝鮮と交流、天神社の植山媛命は土器の神、道真公は土師族の流れを継ぎ、比咩神の父は百済の王の血筋、母は土師族…この事から平野宮は朝鮮や土器と繋がりが深いことが分かります。又五世紀後半頃、百済から渡って来た須恵器の技術者たちが、彼らの故郷の『牛頭』を懐かしんで牛頭村と名付けて住み着き、このお宮を建てた…とも推定されます。

何れにしても朝鮮や土器と非常に関係が深いお宮であると思われる。

第三十九回 平野神社4

平野宮は大切な鎮守様なので、長くなりますが、その他お宮にまつわる話を

少し：

●十月は別名神無月かなな。八百萬やおよろずの神が出雲大社で会議をするため、どこのお宮も神様が留守をするのでそう言いますが、平野宮の主神・今木神は渡来系の神なので会議を欠席します。牛頸は神有月なのです。●神殿の右にある三つの自然石碑は左から熱の神、疱瘡ほうそうの神、頭の神だそうです。●境内の左の菩薩堂は観世音菩薩と地藏菩薩ですが、どちらとも平安時代の作とのこと。神社になぜ佛様が？それは奈良時代に始まった神佛混淆こんごうの考えで、神社に神宮寺という寺が建てられていました。この辺りを大立寺というのはここにその寺があったからだそうです。●戦前まで無病息災を祈るため『湯立神楽』ゆだてかぐらという儀式がありました。大釜に湯を沸かし、神官が笹の葉で参拝者に湯をかける一種の禊みそぎです。●戦後少しまで確か五・六月頃境内に村芝居が掛かりました。「どき回り」です。夜の公演だったと思いますが、境内は溢れんばかりの見物客でした。その座長の芸名が花柳正吾とか島田章太郎とかで笑わせました。また、一六ミリ野外映画劇場も来ていたようです。

第四十回 平野神社5

●ゲートボール場のある所は以前は薄暗い竹林で道沿いに医院や魚屋がありました。又江戸時代一七二四年から四四年の二十年間、福岡藩の儒者竹田定直が退職して「笛塾」という私塾を開いて朱子学で教育をした、とされています。塾のあとは寺子屋、牛頸小学校へと変遷しました。●昭和四十年頃迄は牛頸地区の戸数も少なく、正月でも初詣はパラパラでしたが周辺に団地が増えるにつれて次第にその数を増し、平成に入ってから激増して最近は大晦日の夜から長蛇の列をなしています。昔はいなかった巫女みこさんも数名仕えていてお神酒みきなどを参拝者に注ついでいます。平野宮の神様たちも左うちわですね。(失礼！)

●二の鳥居そばの御神水、これも左うちわの一役をかつているようです。天気の良いときなどポリタンクやボトルを持って次々と水を汲みに見えます。昨年でしたか汲み上げ過ぎて水が涸れたり、揚水ポンプが故障する程でした。見ていると皆さんちゃんとお賽銭をあげていますね。

お宮に関しては以上ですがこれからも地域の守り神としてしっかり崇めていきたいものですね。

第四十一回 牛頸千軒七ヶ寺七浦

六世紀から九世紀前半、朝鮮半島などからの窯業技術者が日本全国に渡来し、

須恵器というそれ迄にない硬くて水洩れしない土器生産の指導をしました。牛頸を中心として三百〇五百基ともいわれる沢山の窯が築かれ、大勢の従事者や運ぶ人やその人達を相手にする商人なども住んで活気があったようです。それで牛頸（当時牛頸という地名であったかは不明）は繁栄し、千軒もの家が建ち、七寺があったと推定されています。お寺は約百五十戸の檀家があれば安定した経営？が出来ると言われますが、七寺に百五十を掛けるとほぼ千軒になりますね。その寺は形跡ありませんが、大体の位置は、東小寺（元牛頸小学校跡、さくら公園、寺山という地名がある）だいらゆうじ大立寺（平野神社に菩薩堂があるのはその名残り？昔神宮寺として存在したのか、現在も大立寺の字名がある）正覚寺（堂の本地区、現在の堂の元古墳公園）、大津寺（牛頸ダムの手前、井出の丘、自決した不動城主榎原兵庫助高政の墓がある）、浄瑠璃寺（中通り地区の大師堂の弘法大師像の台座に浄瑠璃↓璃寺と刻字がある）、あと場所が特定されていないのは上覚寺橋と顕導寺（月の浦？）の二寺です。七浦は（浦は集落のこと）現在でも原浦（上牛頸）、東浦（さくら公園）、日の浦（西鉄ストア近く）、月の浦（月の浦団地バス通りの下）、中浦（堂の本）、小田浦（月の浦団地の東）、小佐浦（紙牛頸原の奥）と小字名で残っていますが今では家がなくなつたところもあります。

第四十二回 須恵器は牛頸の誇り

皆さんご存知ですね、平成二十一年二月十二日に「牛頸須恵器窯跡」が国史跡に指定されたこと！窯跡は牛頸を中心に上大利、春日市、大宰府市の一部に五百基以上もあります。その内調査済みは三百基程に過ぎません。牛頸窯跡群は日本三大窯跡群の一つであとは大阪府堺市近辺の陶邑すえむらと名古屋市東部の猿投山さなげやまです。その他青森県から鹿児島県徳之島まで窯跡があります。

焼かれた時代は古墳時代中期から平安時代までですが、牛頸地域では六世紀中頃から九世紀中頃までの三百年間生産されました。それ以前は土師器はじきという淡褐色の随くて水漏れし易い物でしたが、朝鮮半島から渡来した窯業技術者達が硬くて水漏れしない灰青色の須恵器ともたらしめたのです。須恵器は野焼式の土師器と焼き方が違って丘の斜面に半地下式の穴ガマを築いて焚き口から一番上の煙出し口の間の段々にロクロを使って作ったものを並べて千百度位の高温で焼くので、叩くと金属的な音がします。穴ガマの形やサイズは時代や需要の変化で色々変わりました。用途は最初は祭祀用でしたが、後には瓦、碗、カメ、壺など生活用品に変わり、後期には瓦、骨壺、棺も作られました。製品は主に大宰府政庁や博多方面に運ばれました。又、平野中学校を建てる時、ハセムシ窯跡から今の税に当たる調ちようとして納めた大きなカメの破片に時代と三人の名前がヘラ書きされたものが出土し、市の指定文化財になりました。出土品は

上牛頸のダム記念館、市役所の歴史資料室に展示され、窯跡そのものは上大利の三兼池公園に梅頭窯跡うめがしらが保存されています。ご覧ください。

第四十二回 あゝ壮烈、不動城

平野神社の少し南、平野台入り口右手、黒々と樹が繁る小山は、戦国時代の山城・不動城の跡です。地元では城じょうの山と言ひ、麓には家臣の住まいがあつたという「武士町」という名の土地も伝えられています。今も山頂まで登れますが、遺構は何もありません。築城年代築城した人も不明です。城は室町時代、島津氏に属する古処城の秋月氏の配下奈良原高助が入城しました。天正十五年（一五八七）春、太閤秀吉が九州に進攻して島津勢を征伐した時、島津勢に加担していた秋月種實たねざねは頭を丸めて秀吉に降参し、当時不動城であつた奈良原高政に「お前も降参しろ、到底勝ち目はないぞ」と伝えただけ高政は「降参するなど武士の恥」と、兵卒を逃がし、残つた重臣らと城を守つたのですが、多勢に無勢で抗しきれず、重臣と共に城中で自決したのです。

城主と重臣の墓は上牛頸の丘、大辻に建てられました。高政の子奈良原牛之助政重は、黒田如水、長政公（筑前国初代藩主）に仕え、その末も代々黒田藩に仕えていました。天保六年（一八三五）高政没後二百五十年の命日に奈良原高尚がその墓を補修しました。しかし再び墓は荒れました。昭和二十三年郷土史家・赤司岩雄先生が藪の中に墓を探し出し、墓銘碑を判読されました。現在は高政の末裔・榎原氏がお墓を祀られておられます。

第四十四回 牛頸村を救つた次郎太

『江戸時代、都野次郎太つつのという武士が畑ヶ坂に住んでいた。八代將軍吉宗の享保の強硬政策に加えて大飢饉が襲つた。

でも年貢は減らされず、全国の農民に大きな不満が広がつた。

牛頸もその例に洩れなかつた。その時次郎太は（村を救おう）と筑前藩主黒田継高に年貢半免を直訴したため取り調べのあと定めによつて死罪となり、死骸は後にいう次郎太島に捨てられた。

直訴した者は死罪で墓は建てられず連座制。しかし妻は死罪を免れた。時に江戸時代中頃、宝暦八年十月七日（一七五八）。

十二年後次郎太の妻・いせが亡くなり、次郎太眠る島に葬られ釈妙閑信女と彫られた墓が建つた。

しかし参る人もなく墓は荒れ放題。昭和の初め頃そこには大木が立ちかたす鳥の兵糧ひょうりょうといわれる大きなカズラが巻きつき、夜な夜な火の玉が出る、と怖がられていた。次郎太の家のあとに住んでいた人達にも不幸が続いた。その家の人が

ある先生に相談すると（大木の下にある石を掘り出して清めて祭りなさい）と言われ、その言葉通り石を探し出すとそれが次郎太の妻・いせの墓石であった。

二人の霊を供養するために、その方は地藏尊を祀ってこのことを後世に伝えようと、村の有志に相談した所、昭和四年に村人の寄付で田圃の一角に地藏尊が建った。その後平成十一年に篤志家のご協力で立派な覆屋が出来た。祭日は、いせの墓が見つかった五月一日である。』以上が次郎太地藏にまつわる話ですが、今は若草三丁目に延命地藏として人々の信仰を集めています。

命をかけた次郎太の直訴は一年後藩の許しが出て年貢は半減され、村人は大変助かりました。この事実を牛頸地区に住む人は心に刻んで次郎太に思いを馳せて頂きたいのです。

第四十五回 牛頸の功労者

●「白垣喜八郎翁碑」 堂の本（牛頸二丁目）天保七年（一八三六）堂の本に生まれ、七歳で父を亡くし、翌年継父を迎え十七歳で博多に移って継父の家を嗣ぎましたが、牛頸の家が心配で異父弟に家を譲って戻り、結婚してから鍛冶職に就いて四十数年にして財を成しました。翁は慈善家で沢山の人を救い、仕事として、またボランティアとして石橋や道路や道標をつくりました。【明治二十九年建立】

●「高田虎五郎頌徳碑」 上牛頸中通り（中通り橋際）虎五郎氏は牛頸区の区長、農事組合長、水利組合長等を歴任され、更に大野村会議員に選ばれるなど地方自治に幾多の功労があり、大正九年大野村名誉公民に推薦されました。【大正三年建立】

●「竹田謙窓碑」 平野神社前 堂の本出身、謙窓名は定猗、竹田家九代。第一代定直より定猗まで筑前黒田藩に儒学者として仕え、第四代定良は藩校修猷館の初代校長となり、その後定猗まで校長を努めました。牛頸では明治七年牛頸下等小学校の初代校長に就きました。【明治二十五年建立】

●「竹田修吉先生追慕碑」 平野神社前 碑は謙窓碑と並んでいます。修吉（定修）は竹田家十代。修猷館卒業後、家業であった儒学を修め、明治二十五年牛頸小学校で二十年間教鞭をとりました。教職を去ってからは村会議員、産業組合理事などを勤めました。昭和二十一年没。【昭和十八年建立】

以上の四基は平成二十一年春、ある古老の方の提議で功労や教育に尽くした方の顕彰碑前に訳文碑が建てられました。碑に刻まれた文字が風化して良く読めなかったからです。

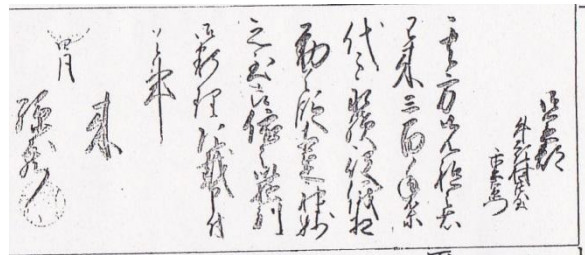
●山上高太郎氏 上牛頸出身、昭和五年第七代大野村村長、昭和三十年第二代大野町町長。また不動城で須恵器窯跡を発見し、その後村内の遺跡調査、保存に

尽力されました。

●石井久氏 上牛頸出身、現立花証券（株）会長。台風で大損害を受けた平野神社の再築に二億三千万円を寄付され、平成三年五月に落成。昭和三十八年には牛頸小学校跡地にプールを寄贈されました。

第四十六回 牛頸村の庄屋さん

今の牛頸は明治の初め頃、上と下に分かれて呼ばれていましたが、明治二十二年に十一の村が合併して、三笠郡大野村になりました。それ以前の牛頸村はいつ頃できたのか分かりませんが、須惠器の焼成技術を伝えた渡来人が朝鮮の牛頸から来て住み着き故郷の名を付けたという説をとれば、凡そ西暦七百年頃かな、と思います。江戸時代（一六〇三年から約二六〇年間）には牛頸村があったのは確かです。その頃全国には村長にあたる庄屋（又は名主^{なぬし}）が各村について、村の土地、人の管理、年貢米の収受、国（藩）の役所との連絡、通達などの仕事をこなしていました。その上村人の健康管理やもめ事、借金の立て替え、道路や河川工事の監督なども庄屋の仕事で、大変忙しかっただろうと思います。功労のあった庄屋は苗字帯刀を許されましたが、又一つには「其の方一代脇差を許す」と書かれたものがあります。牛頸は今の大野城の約半分面積です。「牛頸千軒七ヶ寺七浦」という言葉が残っていて、須惠器全盛期には千戸程あったように伝えられています。が、明治十三年頃の戸数は上と下合わせて百三十戸位でした。



と書かれたものがあります。牛頸は今の大野城の約半分面積です。「牛頸千軒七ヶ寺七浦」という言葉が残っていて、須惠器全盛期には千戸程あったように伝えられています。が、明治十三年頃の戸数は上と下合わせて百三十戸位でした。ところで牛頸村の庄屋は、江戸時代以前から三百七十年間ほど本村・月の浦地に住んでいた戸渡家の次男・重右衛門・重助・孫四朗らが引き継いでやっていたようです。現在ご子孫は上牛頸・原^{はら}にお住まいの戸渡スミ子さんです。戸渡家には当時の郡奉行や山奉行から渡されたご褒美や通達などの古文書二十五点が綺麗に保存されています。上の文書は戸渡家の言葉と御料理を下される、という内容です。なお、牛頸には他にも「庄屋をやっていた」という方が居られるようですが、証拠となる文書も無いので判然としません。

第四十七回 命がけの牛頸用水路

その昔、上大利村、白木原村、春日村では田畑に引く水が足らずにいつも困っていました。それを見かねた乙金村の大庄屋・高原美德と白木原の庄屋・森山庄平が相談をして、牛頸川の北田橋（平野中学校の下）の所から用水路を通

すことになりました。一八四五年のことです。

先ず日の浦池までの工事を始めました。(この工事は上大利側から始めたのか、牛頸側から始めたのか不明)

工事は福岡藩も支援しましたが、藩の財政困難などのために一旦中止。しかしどうしても水が欲しいので、森山庄平の子・庄太が福岡県に願い出て許可をとり、明治十年一月に工事を再開しました。

庄太は私財を投じ、村人達も金を出し合いました。そして牛頸川から溝を掘り始めましたが、その頃の工事は勿論測量機器はなく、道具もクワ、スキ、モッコ(ワラで網かごを作り前後二人で棒に吊るして土などを運ぶもの)位でした。中通りの下でトンネルを掘っていた時に落盤が起きて、水田さんという方が犠牲になりました。でも工事は続いて今の南コミュニティの少し北にあった猫池を経由して平野小学校すぐ東にあるイガイ牟田池、船頭ヶ浦池、そして日の浦池へ通し、最後に上大利の三兼ヶ池まで用水路を通しました。三兼ヶ池では堤防を高くして池の底を浚えて沢山貯水出来るようにしました。その後春日村は自分らで池頭池まで溝を通しました。牛頸用水路は今でも滔々と水が流れています。なお、白木原、上大利、春日からは現在も中通りと横峰の集落へお礼が納められています。

この大工事のことと森山庄太を讃える「溜井之碑」は、上大利のドラッグイレブンの裏の山兼公園に建っています。

第四十八回 四王寺山の毘沙門天様参り

明けましておめでとうございます。早いものでこの連載も次の二月号で四年目に入ります。

スエちゃんも最近くたびれて来ましたが、あと一年くらいは書いてみようかな・・・。

今年には牛頸には関係ない話。昨年大野城市は古代山城サミット一色でした。去る十一月下旬、牛頸区の恒例登山も四王寺山のお勉強登山でした。

所で四王寺山はその昔、大野山と呼ばれていましたが、奈良時代七百七十四年に山頂近くに四王院という寺が建てられてから四王寺山と呼ばれるようになりました。山の東西南北には、北を守る毘沙門天(多聞天)、西を守る広目天、南を守る増長天、東を守る持国天という仏法を守護する四天王が祀られています。今では増長天礎石群跡、広目天礎石群跡と山城時代の建物跡にその名が付けられています。北を守る毘沙門天(多聞天)を祀るお宮が山頂(正式には大城山410m)近くにありますが、毎年正月三日にお祭りがあって、たくさんの方々が夜明け前から登って来ます。家内安全、商売繁盛を祈るためですが、変わったことに、お賽銭を上げるのではなく、大きな板にばら撒かれた

沢山の硬貨の中から、好きなだけ「お賽銭をお預かりして帰る」とその一年間はお金に不自由しないと言われています。しかし、翌年の正月にはお札参りをして、倍返しをしなければなりません。翌年返しに行けそうにない人はお金を借りてはいけないそうです。

私は昨年一〇円預って帰りましたが、お金に相変わらず苦労しました。そういう人は行いが悪いのでしょうか？毘沙門天様ご免なさい！

第四十九回 牛頸の道今昔（その一）

牛頸には昔から生活道路として使われていた道が、今は古道として残っていたり逆に消滅してしまった道が処々にあります。・・・平野神社を中心として見ると、東方面は横峰、南ヶ丘四つ角を経由するか、又は上牛頸の北田橋く平野中学校の下を経由して平田の峠（現・つつじが丘一丁目）に至って大宰府市大佐野を経て二日市へ。東北方面へは南ヶ丘四つ角を左折して南ヶ丘1区を右手に上大利から下大利へ。南方面は牛頸ダム上の黒金山の東の山口超えを超えて山口村（現・筑紫野市山口）へ、別には牛頸山近くの山越え道で筑紫野市平等寺や那珂川町へ。西方面は梶原峠（現・月の浦一丁目の西）を超えて那珂川町上梶原へ。北方面はやや開けていて、牛頸川の流れに沿って春日へ通じていた・・・という様にさびしい孤立感のある村でした。・・・

私ごとになりますが、私が先祖の地牛頸へ定住したのは終戦の翌年、中学一年生の頃でした。当時はここ牛頸、那珂川町の五ヶ山（南畑ダムの上）、筑紫野市の平等寺（山神ダムの上）の三か所は「陸の孤島」と言われタクシーも行きたがらない村でした。農業用の馬車は馬糞を撒きながらよく通りましたが、車などは滅多に入って来ません。少し詳しく述べますと、まず東方面は、今もほぼ同じ道でバスが二日市の方へ走っています。横峰のそばの坂は両側で崖になった「切通し」で今よりずっと急でした。その先は天狗の鞍掛けの松、三叉路（現・南ヶ丘四つ角）を通って平田の峠までは家一軒ありませんでした。峠の少し先、市境の先の橋の所は川底までが深く「めくら落とし」と言われ、橋の牛頸寄りの山裾に「マラ観音」祀ってあったそうです。その付近は木が茂っていて寂しい道で、大宰府参りの人たちを狙って追い剥ぎが出没し、時々刀で旅人を斬りつけて、その血刀を洗っていたという「刀すすぎの池」（現・つつじヶ丘一丁目）がありました。池は数年前までは、それと分かりましたが、今では家が建ってしまいました。

第五十回 牛頸の道今昔（その二）

牛頸から東北方面、今の南ヶ丘四つ角から上大利く下大利までの事は、平成

十九年十二月号で述べたので割愛しますが、南ヶ丘四つ角の所は見事な三叉路で、南側は高い崖でした。左折して上大利の伊藤店までは家一軒もなく、左は丘、右は平田川に沿った細長い田んぼでした。今思うと日の浦バス停辺りに「豆コンクリ」と言って、丸い石をはめ込んだコンクリートの壁があり、少し行くと今度は国鉄水城駅に行く分岐には「五角池」と呼んでいた5角形の池がありました。今そこは「南国砦」という居酒屋になっています。

次に南方面は全面的に山地ですが、山を越えて隣村へ通じる道や、稜線屋谷を辿る道が沢山ありました。一番使われていたのは、上牛頸のダムの上・法照寺のさらに奥、長者原林道の途中から尾根伝いに登っていく道（減災整備されてキャンプ場經由黒金山への登山道になっている）、もう一つは左の谷を詰めて行く道で、両方とも山口超を超えて、今の筑紫野市山口へ通じていました。

その谷道は今荒れ果てて分かりにくいですが、古老の話によると昔は途中まで馬車が入っていたそうです。戦後しばらくして山口にRKB皐月ゴルフ場が出来たため、峠の向こう道は消滅しています。峠には石の道標が立っていて、北は「上牛頸へ」、南は「柿ヶ久保（旧山口村）へ」、西は「面掛・梶原へ」、東は「古賀・湯町へ」と、字が刻まれています。そこから湯町（二日市温泉）方面へは、天拝山を経由するのか、一旦山を降りて行ったのか分かりませんが数年前から有志の方たちと天拝山へ通じる九州自然遊歩道に合流する所までの道しるべを付けたりにしている所です。

この山口超えは、終戦少し過ぎまでは上牛頸の方たちが山口の西蓮寺というお寺へお参りするのによく通った道で、上牛頸の家は殆どこのお寺の檀家です。住職さんもほろ酔い気分でお寺へ帰って行かれた道だと聞いています。南への山越え道は他に牛頸山付近を超えて筑紫野市の平等寺や市境の稜線を辿って那珂川町方面へ行く道もあつたようですが、もう消滅して通れるとは思えません。

第五十一回 牛頸の道今昔（その三）

次に牛頸から西の方面です。昔、大宰府から都へ通じる官道（今の国道）が博多の方へ通じていたのですが、大宰府の少し北から支道が分かれて糸島方面へ向かっていました。大宰府市の大佐野の辺りから平田峠を越え、天狗の鞍掛の松（南ヶ丘四つ角の少し牛頸寄り）から横峰の北の丘を越えて、イガイ牟田池（平野小の傍の池）と花無尾けなしおの六地藏（平野小の正門の向かい）の間を通り、下って牛頸川にかかる地藏橋を渡り、畑ヶ坂から月の浦へ入り、月の浦近隣公園の付近から、現在の月の浦団地を斜めに突っ切り、山をゆるゆると登って梶原峠（現在給水タンクのある少し南、春日市と那珂川町と大野城市の三市町境の少し北）から当時の安徳村上梶原（那珂川町）へ出て、その先は唐津街

道へと通じていました。・・・昔、唐津や糸島方面から大宰府参りに来た女性やお年寄りも峠から大宰府天満宮の方を拜んで戻ったそうです。

また、天狗の鞍掛けの松から真つ直ぐ横峰や平野神社の前を通って行く道も利用されたと思います。その牛頸から梶原峠を越えて行く道は「大宰府参りの道」として沢山の通行人があつたようで、平田峠と横峰の地藏橋の近くと梶原峠には小さな茶屋があつたと耳にします。梶原峠には「峠の火とぼし」という大きな石灯籠が立っていたようですが、今はそれと思われる物が峠のあつたところから八〇〇mほど下の上梶原の山中に保存されています。石灯籠には菅原道真公を表す梅鉢紋が刻まれています。月の浦から梶原峠への道は昭和五十八年頃から始まった造成工事で消滅し、緑の山は一変し、峠の西側は春日原ゴルフ場になりました。

その後、月の浦区が牛頸区から分かれました。昨年私はその古道かと思われ長さ十五メートルくらいの跡を、旧梶原峠と推定されるすぐ手前に発見しました。

第五十二回 牛頸の道今昔（その四）

道の今昔はこれで終わり。牛頸から北の方面は谷が広く開けていて、牛頸川が春日を抜けて御笠川へ注いでいます。

その川沿いの左右はずっと田んぼでした。戦後すぐは、今の西鉄ストアの手前から春日神社の手前までは家がなくて車も通らず、のんびりと馬車が行く道でした。

西友の前を南北に走る三十一号線はまだなくて、藪と雑木の丘が上大利の方へ続いています。西鉄バスが博多駅から五十川、井尻経由で走り始めたのが昭和三十年十月でした。（この辺記憶がちょっと曖昧）牛頸から惣利を通って行く砂利道は物凄い凹凸道で、バスの後部に座ると頭を打つくらいに飛び跳ねながらガタゴト走っていました。

通勤にそのバスを使っていた妊娠中の妻が流産しないかいつも心配していました。でも、春は菜の花、秋には丘の紅葉を眺めながら飛び跳ねバスを楽しんでいました。

（あ、忘れていました、昭和四十四年には西鉄下大利駅から南ヶ丘一丁目までマイクロバスが運行開始したのです。）

春日市圏内ですが、現在の惣利交差点から左へ分かれる道もありました。そこを少し行くと惣利池を左下に見なが歩きました。右手は松と雑木の疎林の丘。今もその道は部分的に残っています。今では池のそばにコーヒー店「もりずみ」がありますし、丘は削られてナフコの広大な敷地になっています。その先には

右手の小高い所に火葬場があつて、時々煙突から黒い煙を吐いていました。私の父もそうですが、牛頸の人は大方そこで火葬されていたようです。

道はその左下を淋しく昇町の方へ続いていました。現在のバス道路はあとから新しく造られたものです……

これで一応牛頸から外へ通じる昔の道のことを記したつもりですが、何しろ四十年から六十五年前の話なので記憶違いもあつたかと思ひます。乞うご容赦。

第五十三回 牛頸の道しるべ

道しるべ、道標とも言いますが、牛頸には昔村人や旅人のために建てたものが、主な分かれ道などにありました。

また、橋の名前を彫ったものや、新しく道を通した時の記念の碑などが残っています。道標は現在平野神社に2基移されています。それを見ると、大楠の下は「春日昇町・大佐野二日市・梶原越」文殊菩薩様の碑の後ろには「二日市大宰府・？頸山口越・岩戸方面」と字が彫られています。今では消滅した地名峠名もあります。但しこの道標はどこに建っていたのがよく分かりません。山口越道標のことは第50回の昔の道の話の所で書きましたが、今は使われていない山口峠にポツンと建てています。



橋の名前では、牛頸2丁目の平野川に架かる「堂之本橋」と平野中学校下の



「北田橋」があります。道標や橋名のはまだ他にもあるかもしれません。これらは古いものと言つても殆どが明治年間以降に建てられたものでしょう。建てた方は第45回牛頸の功労者で書きましたが、

白垣喜八郎翁がボランティアで建てたのかもしれませんが……

しかし昭和三十九年から突如始まった牛頸地区の団地造成工事のため、沢山の道標類が行方不明になりました。全く心ないことをしてくれたもので、とても残念です。

第五十四回 猿田彦神と庚申塔

さるたひこしん こうしん

道しるべの話が出たからには切り離せないのが、道の神様「猿田彦神」です。猿田彦神というのは、日本神話でニギノミコトが天から地上に下られる時に先頭に立って道のガイドをし、後に伊勢の国の五十鈴川の上に鎮座したという神様で、容貌魁偉で鼻の長さが7尺あた(約1m30cm)、身長が7尺(2m10cm)と伝えられています。その後、猿田彦神は道を行く旅人や集落を悪霊から守る



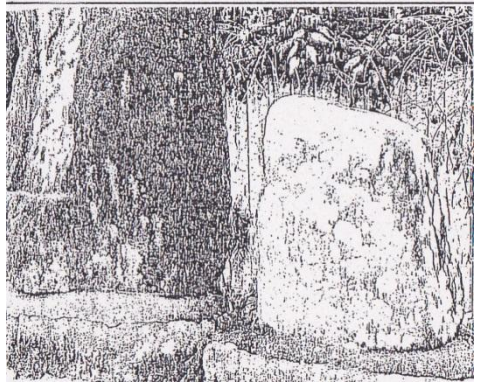
神となり、或いは豊作を願う神ともなりました。そのため集落の入り口や分岐点に建っていることが多いのです。そして中世以降は庚申の日に猿田彦神を祀り、またこれも道の神・道祖神と結びつけられたようです。所で、この石碑は旧牛頸地区には十基あり、庚申塔を合わせると十二基で、大野城市内（三十九基では最多になっています。それだけ当地区は未だ自然環境が保たれ、そして古いものを大事にしている土地柄なのでしょう。ただ、面白いことに「猿田彦神」は碑に彫られた文字が色々で、猿田彦大神が二基、猿田彦太神が七基、猿田彦尊がお宮に一基、と表現が異なっているのです・・・。

次に庚申塔ですが、庚申と言うのは干支の一つでカノエサルですが、これも神仏習合の考えに則り、猿田彦神と同様に考えられています。これは二基あり、一つは庚申尊天、もう一つは庚申と彫られています。これら合わせて十二基は地元の古いもので宝暦十一年（1761）新しいものは昭和2年（1927）に建てられています。これらは地元も人たちがお金を出し合って建てたのでしよう。

皆さんも散歩を兼ねてこの十二基を訪ねて歩いては如何でしょう。（牛頸郷土史参照）

第五十五回 庚申について

庚申（カノエサル）は干支と十二支との組み合わせで、六十日に一度回って来ます。日本では各地で庚申信仰の祭りがあり牛頸でも貴族の間に始まった庚申の日の夜は、碁・詩歌・管絃の遊びで「庚申御遊」という宴をやっています。戦国時代には織田信長も柴田勝家ら二十人程で庚申の酒席を行ったとの記録があります。その時度々トイレに立った明智光秀を一人が槍を持って追いかけて「こら！キンカン頭よ、何で中座するのか」と問い責めたそうです。その頃までは「守庚申」と言っていたのが「庚申待」と名を変え、元々神教の祭りであったのが仏教と結びついて一般人に広まって行きました。この信仰は江戸時代に盛んでしたが大正以降は急速に衰えて行きました。そして庚申の申とサルと読むことから猿田彦神と結びつきました。庚申待は六十日に一回、年に六〜七回廻ってきます。牛頸ではこの夜は当番の家に集まって床の間に猿田彦神の軸を掲げ御神酒・飯・線香・灯明・菓子などと供え、徹夜で飲み食いお喋りをします。



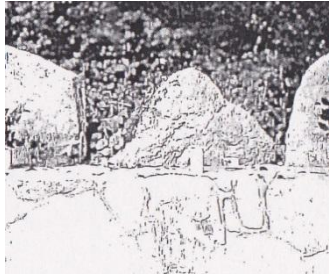
何故徹夜か？人の体には三戸の虫が三匹、夫々頭・腹・脚に住んでいます。庚申の夜に眠ると、その三戸の虫が体から抜け出て、天の神にその人の罪業を申告します。すると天帝がその人の罪に応じて寿命を縮めたり死を与えるそうです。それで三戸の虫を拘束するために眠れないのです。また、その夜セツクスをして生まれた子は泥棒や不具になる、と言われていています。この信仰は中国の道教の「三戸の説」に始まっています。牛頸地区でも昔からお庚申さまが行われていますが、今では旧小字十か所中、五か所が廃止しております。牛頸の庚申塔は井手と丸隈に一基づつありますが、庚申信仰が高まった結果建てられたのでしょうか。写真は丸隈の庚申塔（庚申尊天）ですが猿田彦太神と並んでいますね。

第五十六回 小さな神様たち（その一）

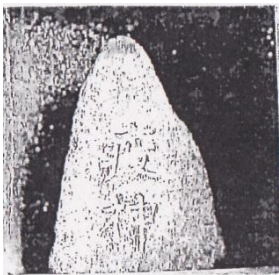
牛頸区には昔から可愛い神様が沢山居られます。そして今でも丁寧に祀られています。その神様たちとは？

一・**疱瘡の神**（ほうそう）・・・平野神社神殿の右側、山裾に、台座の上に三柱の神様が

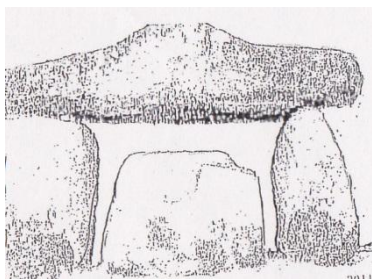
仲よく並んでいます。真ん中が疱瘡の神様、左は熱の神様、右は頭の神様と聞いていますが、今いちはずきりしません。この疱瘡の神様に祈ると疱瘡にかからないし、又軽くて済むという事です。昔この病気が天然痘と言われて恐ろしい伝染病でしたが、イギリスのジェンナーが発明した種痘によって一九八〇年に絶滅し、今はタダの石になってしまいました。



二・**疫神**（えきじん）・・・この神様は疫病を治してくれるところか、はやらせる恐ろしい神様、いわゆる疫病神です。だからはやり病がはびこった時「疫神様どうか病気をはやらせないで下さい、何卒勘弁してください」と御願するのです。変な神様？どうしてこんな神様がおられるのでしょうかね。この神様も医学が発達した今はそれこそ役払いですね。平野神社の少し南、大立寺の阿弥陀如来堂の前にありますが市内では乙金の宝満神社とこの二か所だけです。



三・**水神**・・・飲用水や田んぼにかける灌漑用水などを司る神様であり、ひいては火事を防ぐ神様でもあります。

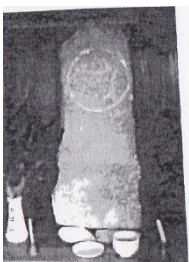


牛頸・中通りの高田導敏さん方のそばに祀られています。もう一か所は牛頸ダム公園にあります。この水神はダムが作られる前には以前の牛頸貯水池？の堤防の上にあります。したが、ダムを作るときに移されました。

第五十七回 小さな神様たち（その二）

四・巖島社の市杵島姫命いつくしま いちきしまひめのみこと

平野神社鳥居を潜ってすぐ右、大楠の先の小社に祀られています。昔から弁財天として親しまれている豊かな女神です。



弁財天はインドの神話では水神です。財福・名声を助け芸能の神であり水分りの神です。昔は社の周りの濠に牛頸川の水を引き入れて雨乞いのお祈りをしたら必ず雨が降ったそうです。自然石のご神体には梵字が刻まれています。

五・奥宮の仁徳天皇みくよ

高さ三三センチの自然石。仁徳天皇は五世紀前半の天皇でオオサキノミコトとも呼ばれ、朝鮮半島とよしみを交わされ、民が年貢の納付に苦しんでいた時に三年間それを免除したという慈愛に満ちた方でした。そのことを読まれた歌碑が横に建っています。



この神はこの山に最初から祀られていたのかもしれませんが。

六・天神社はにやまひめのみこと・平野神社拝殿の右側にある石造りの祠。祭神は埴山媛命。埴は土器を作るときの粘土のこと。祠の正面の梅鉢の紋は菅原道真公の紋で、公

の祖先は土器製造の一族だったそうです。この天神社は天神↓田神という考え方から田の神であるのかもしれませんが。



七・原の神はる



上牛頸から平野中学校へ行く三叉路の近く。以前は屋敷のある社の中にありましたが、社は台風で倒壊しました。祠の扉の中には四個の自然石のご神体があります。山の神は牛頸ダムの堰堤の手前にもありますが、これはハセムシの山中にあったのを移しました。山仕事に入る前には必ずこの神様にお参りをしていただきますが、正月の四日と十四日は女性の山の神が裸になって川で洗濯や洗髪をするので、山に入ってはいけないそうです（私も一度は

拝見したい)。山の神のお祭りはダムの方は一〇月二〇日、原は二〇日か二四日です。

★これらの神様は例外なく自然石で、殆どが三角形かまたは頭が尖っているのは何か訳があるのでしょうか？そして誰がどこから探してきて、何故、その石にきめたのでしょうか？

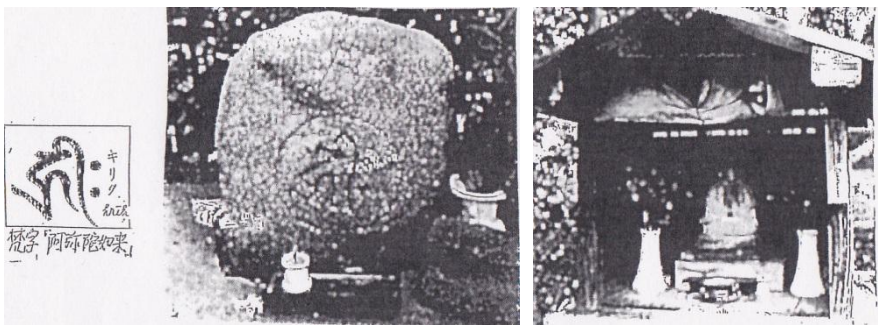
第五十八回 屋敷神

屋敷神とは全国的に、災い除け、家内安泰を願って屋敷の庭やその家の山林に祀る小社の事です。

牛頸の旧家である十軒ほどに今も祀られております。ただ、屋敷神と言っても佛さまもそれに含まれているのは、旧来からの神仏習合の習いからでしょうか。牛頸では、「地神さま」とも言われ、家に不幸や病人が続いたり、災厄があった時に祀られるのが起源とも言われています。

今回はその中で、中通りの田中輝雄さん宅の庭にある屋敷神をご紹介します。祀られているのは「天神様」で、田中さんの話によると「これを建てたのは恐らく曾祖父でしょう、子供の頃は今のよりずっと大きくて立派なお社でした。戦後古くなった家を建て替えた時にお社が小さくなりました。お祭りは七月二三日です」との事です。

それから天神様の左に並んで梵字を彫った石碑があります。梵字はかなり風化していますが、おそらく「阿弥陀如来」を表していると思います。これも天神様と同じ頃に建てられたもののようです。なお、牛頸にあるその他の屋敷神は、稲荷大明神、厄神、虚空蔵菩薩、地藏菩薩などです。大野城市全体では仏様系が三〇強と断然多く、神様系は二〇強です。中でも変わっているのは、泥棒除けの神様、加藤清正公、男根を祀ったマラ地藏さんなどがあることです。



第五十九回 紙芝居できました！

私、昨年暮れ、急に思いついて地区の子供たち小学校4〜6年生を対象に牛頸歴史紙芝居を作りはじめました。

有難いことに牛頸区長を始め役員の方のご賛同を得て支援を頂きました。

自分らが住んでいる牛頸（6区）の史実や伝承、民話などを楽しく理解することとで、この郷土により関心と愛着を持ってもらい、ひいてはふる里を大事にしましょう、という思い入れです。南地区の3小学校、6公民館などにPRに回りましたが、その間に福祉行事がからお呼びがかかってこれまで七回高齢者の方々の前で上演して好評でした。これ全く予想外！その後平野小学校の六年生

と四年生に牛頸の名前の由来の話のあとに2編を上演しました。

紙芝居の主題は《スエちゃんの牛頸むかし話》。現在制作済みは、歴史編では、

- 牛頸は須恵器のふるさと
- 命をかけた牛頸用水路
- ああ壮烈、不動城
- 牛頸村を救った次郎太の4編、

民話では、

- 底なし沼の人柱
 - 次郎太郎の松
 - 盆ダゴ
 - 深さをはかれない底なし沼
 - 沼から運ばれたキセル
 - 刀すすぎの池
- の6編です。

あの有名な民話「天狗の鞍掛けの松」は、ただ今鋭意制作中で来春完成予定です。お呼びがあれば、いつでも、どこでも参上しますので、どうぞお最真に！あ、それから来年も牛頸ばなしを続けますので皆さん



読んでください。

第六十回 百歳を超えてなお元気、森山翁

明けましておめでとうございます、今年もフアイト！

・・・今月号は少し趣向を変えて牛頸の男性最長老の方のことで。・・・牛頸4丁目にお住まいの森山鐵男てつおさんは、昨年十一月七日でめでたく一〇〇歳を迎えられました。私、暮れにお伺いして上寿のお祝いを述べ、区情報誌のための取材をさせて頂きました。

翁は明治四四年一月七日、平野神社近くの大立寺だいりゅうじで生まれ、その後横峰に

移り、牛頸小学校卒業のあと大野村尋常小学校を出られ、一八歳で当時日本領であった台湾に渡り、警察官を経て空軍、陸軍に入り、戦後は一時警察に復職、故郷に帰ってからは大野村役場、大野町役場、大野城市役所と公務を永年勤められ、定年退職後は市議会議員、牛頸区長を3期、市や区の要職を長く勤められました。

ユキ夫人との結婚生活は今年で七五年になるそうです。

ところで●長寿の秘訣は？ 体を動かすこと、クヨクヨしないこと ●スポーツは？ 何でもしたけど、銃剣道では全台湾を制覇して一番になった ●楽しかったことは？ 台湾から帰って家族・親戚・同僚らと全国旅行をしたとき ●苦勞をしたことは？ 生来ののん気者で運が良かったので苦勞は何もない(・・・実にくらやましい!) ●お子さんお孫さんは？ 子供五人、孫七人、ひ孫五人 ●昔の思い出は？ 牛頸小学校で二月一日の紀元節(今は建国記念日)の日、大雪だったので竹馬で学校に行ったこと、イトコが那珂川町梶原から嫁を迎えた時、大きな竹籠に結納を入れて梶原峠(今はこの峠はない)を超えて持つて行ったこと、以上終始笑顔で取材に答えられました。更なるご長寿をお祈りいたします。



第六十一回 古墳と古代の住居跡

旧牛頸は古代(六世紀ころから)九世紀中頃まで朝鮮半島からの渡来工人の指導によって須恵器が盛んに焼かれた、ということは第四二回でお話ししましたが、その頃の牛頸はかなり繁盛した村であったようです。それは古い寺跡や古墳、住居跡などによって知ることができます。石器時代から縄文・弥生・奈良時代の遺跡が窯跡では二〇六基、古墳群は五四基とあちこちに分布しています。

古墳は塚原(牛頸四丁目く若草三丁目一帯)が二六基と最も多く、次に中通り(宮野台)に一九基、あとは旧牛頸内に併せて九基となっています。古墳の形態は全て円形で、当時の豪族や須恵器工人のリーダーなどの墓と考えられています。

私の家の近くの「胴の元古墳公園」の古墳は平成五年の区画整理で山が削られてしまっただけで、その位置が五〇mほど西南に移動復元されましたが標高一四mのやぶ山の上に直径一一mの円墳としてありました。一四二〇年位前のもので須恵器、青銅、金メッキしたイヤリングやガラス玉が出たそうです。子供



の頃に二回ほど中へ潜って見たことはありませんが、何もなく石囲みのほら穴としか見えませんでした。前述の塚原には縄文時代から奈良時代までの住居跡や墓が発掘されて縄文土器、土師器はじき、須恵器、それに瓦、石器、鉄器なども出土しました。

当時の住居は竪穴式や堀立柱式でワラやカヤの屋根を葺いたものでしょう。そこは今「塚原公園」になっていますが、平地で水の便と日当たりが良くて生活しやすい所だったのでしょね。

男性は狩りや山の仕事に女性は畑仕事や洗濯や炊事に忙しく、子供たちは、広々とした野原を駆け回っていたことでしょう。そういう想像をしてみると本当に心が和みますね。

第六十二回 昔のお店・その一

牛頸にあった古いお店を調べました。私は終戦の翌年、中学一年生の時に私の先祖の地牛頸に住みついたのでご紹介する店の内①のことは全く分かりません。ほかのお店のことも余り買いに行つた覚えがないので、それで地元の方達に取材したのですが、失礼ながら中には記録が定かでない部分もあるようです。その点は何卒ご容赦ください。

① 永ちゃん店えい みせ 場所は中通り（宮野台の西）高田隆敏さん宅の門を入つたすぐ右手にあつたそうです。当時の店主は高田永吉さん。いつ頃店をやつていたかはよく分かりませんが、戦時中にはあつたようです。酒、蒟蒻、豆腐、駄菓子、日用品などを売り、又小麦粉が欲しいときは「ソーメンがえ」と言つてソーメンと交換していたそうです。それから左隣の高田増男さん宅は昔「巡查屋敷」と呼ばれていて駐在所（交番）がありました。またその向かい（今は田んぼ）には「もやい風呂（共同の風呂）」があつて中通り8軒が当番制で管理をしていたそうです。それから高田増男さん横のゆるい坂道は「シュージの坂」と言つて昔は馬車がやっと一台通る位の狭い石畳で、夜になると「馬の足が下がる」と言われて怖がられていたそうです。現在は少し広げたので軽自動車なら通れるようですが、坂を登り切つた所に猿田彦神の石碑があつたりして、懐かしさと情緒を感じる私の好きな道です。

② 次郎ちゃん店じろ みせ じっちゃん店とも言いましたが、場所は堂の本の入り口・猿田彦神の碑の前、店主の森山次郎さん（その後森山茂さん）商品は酒、豆腐、駄菓子などでした。いつ頃からやつていたかは分かりませんが、昭和の後半くらいに一時「うな十」というウナギ屋に変わりました。

※簡単な位置図と写真は「その二」に入れます。

第六十三回 昔のお店・その二

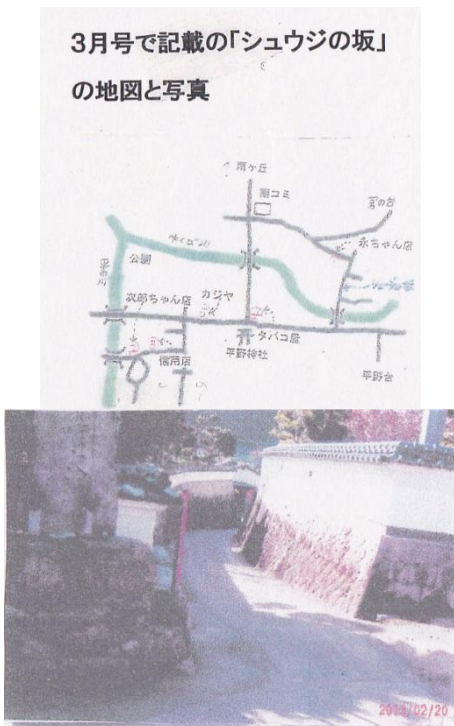
③ 信用店 しんようみせ 現在の農協に当たるようですが、酒、日用品、農業用品などを売っていたそうです。また菜種 なたね を持つて行ったら油と交換してくれたり、野良仕

事帰りの人が四斗樽からお酒の角 かく うち（小さな木の枡でちよいとひっかける立ち飲み）をやっていたそうです。道の向いには店の倉庫がありました。場所は次郎ちゃん店の少しお宮寄りの所にあつたと思います。

④ タバコ屋 平野神社の向い、現在の公民館の隣の篠原一木さんの家にあつて主に煙草を売ってました。

⑤ カジヤ 現在の野村整形外科のそばにありました。牛頸唯一の火の見櫓の所にあつて、子供相手の小さな駄菓子屋さんの感じで篠原さんと言うおばあちゃんが店番をしていました。カジヤと呼ばれていたのは以前そこに鍛冶屋があつたからで、馬の蹄鉄を作つて馬の足にそれを取り付けたりしていたのを覚えています。そこではコマの芯も作っていました。その火の見櫓に消防団が登つて火事や訓練の時カーンカーンと鐘をついていたのが今では懐かしい音の記憶です。その他古くは平田峠の茶屋、花無尾 けなしお の地藏茶屋（森山鐵夫さんのお父さん）や、戦後はお宮の右手に魚屋や医者の家もありました。

3月号で記載の「シュウジの坂」の地図と写真



以上取材でお世話になつた方々に厚くお礼を申し上げます。

第六十四回 牛頸村の水車・その一

昔、牛頸村にも水車が回っていました、ゴットン、ゴットン、ザー・・・静かな里山の風に乗つて、のんびりした水車の音が聞こえていたのでしょうね。水車は電気のなかった時代に自然の力を利用した大事な動力でした。米をついたり、小麦をすつて粉にしたりと。明治一三年（一八八〇年）福岡県が県下全町村の実勢を調べて作った「福岡県地理全誌」を見ると、牛頸村には四カ所水車があると記載されています。面白いことに項目は「車輪」とあつて「水車四

所、井出・中通り・花無尾・月ノ浦」と書かれています。その頃、一二九戸の村に四つも水車があつたとはかなり利用度が高かつたということです。以下私が調べ、取材したものをまとめました。

①井出の水車・・・牛頸ダム手前、浄水場の向かい側の一の井出の下流、クレストハイツ田のそばに昭和の初めの頃まであつたようです。近くの方に尋ねるとワラ葺きの水車小屋と石垣が残っていたそうです。その時の水車を回す「捨て水」の水路が山の裾に今も残っていると。経営者は手塚定次郎さん。近くの手塚正一さん方にそこで使っていた大きな石臼がありました。

②中通りの水車・・・クルマトコの水車とも言つて、隈一井出の近く、現在の(株)ニーズのそばの牛頸川にあつたそうです。当時の碾き臼の上下が高田隆敏さんの庭に据えてあります。※次号で写真掲載します。

③花無尾の水車・・・地蔵の水車とも言つて、地蔵橋の近くにあつたようです。森山鐵男さんのお父さんが経営していました。森山さんの話だと、水城村(現大宰府市)の佐野浦(大佐野ダム一キロほど上)のおばあさんが背中に大きな玄米袋をしょつて精米にきていたそうです。佐野浦からだ約五キロはあつたでしょうね。

(次号に続きます)

第六十五回 牛頸村の水車・その二

④月の浦の水車・・・平野川(昔の下牛頸川)の月の浦橋の所の石井手のすぐ下流にあつたそうです。今ではその記憶のある方が居られないのですが、三月号の「次郎ちゃん店」の先代・森山次郎右衛門さんが経営していたと聞いています。

⑤郷ノ木の水車・・・平野神社の前を南ヶ丘の方へ行くと平野橋(以前は通称ゴウノキ橋)があり、そのすぐ下流の郷ノ木井手の近くにありました。田中さんという家が水車を回していました。戦後何年かまであつたので、私もよく覚えています。ただ水車小屋を覗いたことはありません。

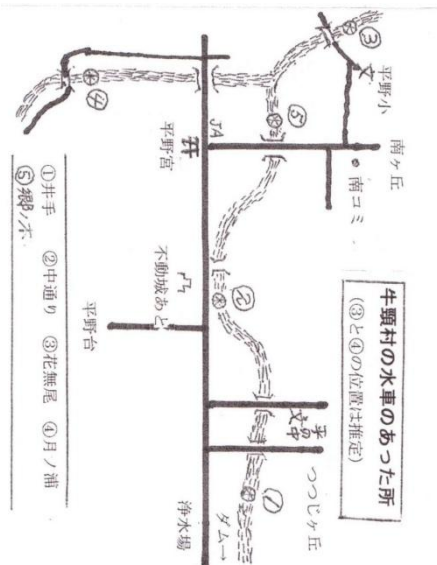
今回取材でご協力頂いた方々に厚くお礼申しあげます。

※「井手」というのは、川から田に水を引くための川をせき止める井ぜきの事です。昔は一七ヶ所の井手があつたが、現在は数ヶ所消失しています。

※水車の仕組み・・・水車の芯棒に直結した木製の歯車の力が水平の歯車に伝わり、その歯車が花崗岩で出来た大きな石臼に嵌め込んだ沢山の丈夫な木のでっぱりを回します。その上の臼の穴から入った穀物が動かない下の臼との隙間ですり潰されて粉になって出てくる仕掛けです。精米は数本立っている

柱が上下し石臼の中の玄米をゴットンゴットンつく仕組みです。

※八女郡広川町逆セ谷さかせたにの「ゴットン水車」は珍しく年中稼働している大水車で、そこでつきたての蕎麦が食べられます。



中通り高田隆敏さん庭中通り水車
上臼 直径67cm高さ24cm

第六十六回 昔の食べもの

牛頸で普段食べていた物を少し調べました。牛頸だけの物ではなく、少なくとも旧筑紫郡位では食べていたでしょう。勿論今でも食べられているものはありません。

雑煮・**ほぼ博多雑煮**ですが、柴栗の枝で作ったクリアイ箸で食べます。この年ヤリクリ**按配**がうまく行くように縁起を担いだのでしょう。しかし牛頸では何故か**雑煮**を食べない家があったそうです。**オニ味噌**・正月七日のほんげんぎよう(ドンド焼き)の時、台所を守る荒神あらいじん様に供えた餅をその火で焼いて家に持ち帰り味噌を付けて食べました。**力餅**・一月十四日の朝に食べると一年中力が出るそうです。**ダンダラ粥**・一月十五日小正月の朝、小豆と餅を入れたご飯を、カヤ(ススキ)の堅い茎で作った箸で食べました。**節分のアラレ**・元旦の夜に食べたマス餅の残りで作ったアラレを炒り、大豆と混ぜて豆撒きをしました。これをコオリ餅と言いました。**厄落とし餅**・春の彼岸に初老の祝い、数え年四十一歳の厄落としの時家であった餅を平野神社に供えました。白い餅の上にくチナシの実で黄色く色を付けた鏡餅で、餅の中に四十一円を入れました。**フツ餅**・春先に食べるヨモギ餅の事、アンは半殺しと言って少しいい加減に作って入れます。**ガメシバ饅頭**・ガメノハ饅頭とも言い、サルトリイバラの葉つ

ばで包みます。田植えが終わった後のサナボリ（お疲れさん会）やお宮のおよど（夏祭り）の時に食べました。**お茶の子**・農作業の合間に食べる軽食。うどん、ソーめん、カボチャのダゴ汁、カイ餅（くず米を粉にしたものをそば粉と合わせて熱湯を注いで練って作り、きな粉・黒砂糖・味噌などを付けて頂きます）**牛頸名物・カシワ飯**・地鶏を使うのでご飯がてらてら光っています。味が少し濃くて堪らなく美味しいですよ、ひゃー食べたい！ **牛頸限定・鼻よじ**
しダゴ・十月十七日のお宮の「おくんち」の時に作ります。米の粉で作った団子を汁気の少ないゼンザイにまぶして食べます。あまりに美味しいので鼻が汚れるのも構わずに食べるのでユニークな名前がつけました。**果物では**・甘柿のガンザン、トンゴ柿。ガンザンは最近見かけませんが、大きくて甘く口の周りがベトベトになりました。以下は子供のおやつですが、**香ばし**・モミを炒って石臼でひいてモミ殻を除いて粉にしたもの、そのままパフパフ食べました。**パング**・山芋のつるに出来る丸い実（ムカゴ）。その他アラレ、はったい粉（麦こがし）、炒った大豆やトウの豆（そら豆）、焼き芋、ポンポン菓子など。：子供が野遊びの時に取って食べるものでは、野イチゴ、クワの実、ツバナ、ギシギシ、イタドリ、イヌビワ、山グミ、ミソツチヨ、山モモなど、変わった物では蜂の子や柳虫。川土手柳の枝に潜っている白い幼虫。気持ち悪いけど焙って食べると甘かったです。

第六十七回 牛頸村のデータ

古い資料からとった牛頸村の色んなデータをまとめてみました。

- 天正元年（1573）・室町幕府が滅んだ年）
田45町、畑7町、石高は628石余
- 享保二年（1802）戸数95、人口456、田57町余、畑12町余、商人3、大工1、木びき（キコリ）1、猟師10、牛馬87頭
- 明治十三年（1880）戸数129、人口630、田68町、畑12町余、米1135石、山林641町余、池14か所、牛馬90頭
- 明治十七年（1884年）戸数136、人口707
- 明治二十二年（1889）戸数125、人口746
- 大正初め 戸数107、職業は 医師1、教員1、木びき1、大工2、左官1、石屋2、桶屋2、粉屋（水車）3、農業94
- 昭和三十年（1955）戸数152、人口1001
- 平成二十四年五月三十一日現在の牛頸区だけの戸数1776、人口459

※ 古いデータは上牛頸と下牛頸を合わせたものか別々かははっきりしません。

データをみると明治二十二年の戸数は125戸です。大野城市の面積の約半分を占めた牛頸村、123年前現在の7区に125戸ですから本場にパラパラとしか家がなかったのですね。須恵器が盛んに焼かれていた頃は「牛頸千軒七カ寺七浦」と言われていますが、須恵器が衰退してから純農村の姿に戻ったのですね。それを考えると今は凄まじい！

第六十八回 今はなきあの行事・(一)

以前は色んな習慣や行事があったのですが、時代と共にいつの間にか無くなったものが沢山あります。その殆どが文明の進化の陰に追いやられ、潰され、面倒がられたものですが、長い年月をかけて「良かれかし」との思いで作られ、伝えられたものばかりだと思います。中には今もあったらいいのとか、復活して欲しいものもあります。今までの話の中で登場したものは書いてその幾つかをご紹介します。

●一月一日 若水汲み 元旦の朝家長がしました。上牛頸の原では手桶とひしゃくを持って原浦川の水を汲んできて釜で沸かし、その湯で家の者が顔をあらい、干柿をお茶うけにしてお茶を飲みました。横峰では荒神様とお仏壇に供え、正月花の差し水にしました。お茶うけは矢張り鏡餅の上にある干柿でした。

●一月一日 マス餅 米などを量るマスの形をしてマスのサイズ(どのくらいのマスでしょうか)の餅の上だけを焼いて重ねて黒豆を付け食べたそうです。今年もマスマス元氣にかマメマメしく働くという願いを込めて食べました。でも焼かない下の部分はどうしたのでしょうか？

●一月二日 ナイゾメ 緬い初め 農事の仕事始めのことで、牛馬に引つ張らせて田を耕すマガ(土をならす農具)やモツタテ(土を掘り起こす農具)の縄をワラで緬いました。牛や馬のためのゾウリを作ることもありました。牛頸では足が早くて牛の1.5倍位の効率の馬は若い人が飼っていましたが、餌代が高くつき、馬代も値が張りました。牛は仕事が少ないので年取った人が使っていました。餌もワラや刈って来た草を食べさせていたので餌代が要りません。明治一三年の記録によると牛頸村の牛は六一頭、馬は二九頭となっています。ナイゾメをした後は朝風呂に入ったそうです。

第六十九回 今はなきあの行事・(二)

●一月一日 窯休め 台所のカマドのことだと思いますが、年に一度カマドにも骨休みをさせたのでしょうか。元旦はお風呂も焚きませんでした。ホウキで掃わくこともしませんでした。主婦の骨休めの意味もあつたのでしょうかね。

●初あるき お正月には若いお嫁さんは実家に帰りました。お土産は二升餅の二段重ね(四升分)。車がない時代、手に持って歩くのは重かつたのでしょうか。その日は日帰りが決まりで、もし実家に泊まると苗代の苗にドベ(泥)がつく、と言われて嫌われました。実家が遠い嫁さんは大変！

●一月七日 七草汁 ナナクサジュルと言いました。正月は六日夜まで味噌を使わなかつたようです。七日の朝、七草を入れた味噌汁や、七草がゆを頂きました。そして面白いのは七草をゆでた汁を爪につけた後は爪を切っても良かつたそうです。ご存知でしょうか春の七草は、セリ、ナズナ(ペンペン草)、ゴギョウ(ハハコ草)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ(タビラコ)、スズナ(カブ)、スズシロ(大根)で、これを食べべて一年の邪気を払いました。

●一月二〇日 骨正月 女正月とか廿日正月とも言います。また西日本では所によつて骨しゃぶりとか骨おろしなどともいいました。女性だけが寄り合い(親睦会)をして、正月料理の残り物を持ち寄つておしゃべりを楽しみ、女性の日頃のストレス解消と情報交換の場なのでした。寄合と言えば、戦後の昭和の末頃までは主婦やお年寄りが手作りの田舎料理を一軒の家に持ち寄つて賑やかにやつていましたが、最近はどうなんでしょうか。

第七十回 今はなきあの行事・(三)

●四月四日 厄明け 数え年で四十四歳の男性同士が連れだつて大宰府天満宮へ参り、厄を無事に終えたことを神様に報告し、お礼を言いました。その時梅の木を一本奉獻して、梅の木の下で酒を飲んで帰りました。

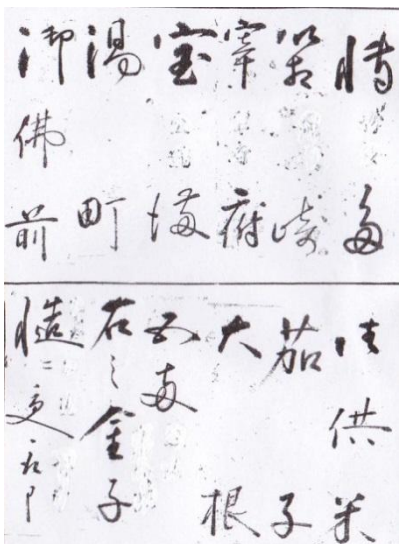
●千人まいり 日照りが続いたり、田んぼに害虫が発生したりすると、村の人たちで相談の上千人まいりをしました。村人が集まつてサカキの葉などを準備して平野神社の前でサカキを一人一回もらい、拝殿で拝んだあと拝殿の後ろを回つて戻つて来ます。これを千回やると千人が参つたことになり、千人まいりと言いました。

●絵馬上げ(トビトビ) 平野神社の絵馬堂には見事な絵馬が沢山掲げられています。絵馬というのは初め、神様をお願いごとをしたり、願いがかなつた時に生きた馬を献上していましたが、それが木の馬になり次第に板に馬の絵を描いたものを奉納するようになりました。後になって有名な歴史の故事や武者絵を画家に描かせたものが主流を占めました。今では大宰府天満宮では合格祈願、宇美八幡宮では出産祈願、姪浜の愛宕神社などでは良縁祈願、結婚祈願など小

さなものを外に下げていますね。牛頸では昭和十五、六年頃までは子供たちが馬の絵を描いて、家ごとにお金をきってその絵を売り、そのお金で絵馬を買い上げてお宮に納めていました。それをトビトビと言いますが何故なのかわかりません。

第七十一回 牛頸の学校 その一

牛頸村の教育は江戸時代のほぼ中頃、享保九年（1724）の笛塾に始まると思います。筑前黒田藩に儒者として仕えた竹田定直が六四歳藩を退職して、平野神社の北（今のゲートボール場）に笛塾という儒学（朱子学）の私塾を開き、定直が亡くなるまでの二〇年間近隣の村民に教えていたとのこと、しかしどの文書から笛塾という名前が出て来たのか、私が数年前から調べていますが判明しません。福岡県百科事典、教育史関係、歴史書など幾つもの本に「笛塾牛頸にあり」と載っているのですがその出処がわかりません。古文書などでその存在が判明すれば、それがあつた場所に「笛塾跡」と記した碑を建てても良いと思つています。あつたであろう笛塾のあとは寺小屋になつた、というのは牛頸のある古老から聞き取りました。それは明治の初め頃まで続いたようです。寺小屋の先生は全国的に武士、学者、僧侶、学識のある町人や百姓身分の人がやっていました。牛頸ではどのような方がやっていたのでしょうか。寺子屋の教本で、安政六年（1859）前原市瑞梅寺の物を持つていますがその内容が実に興味深いです。寺子屋では先ず「いろは」から習いますが、人名の読み方・書き方から始まつて地名、野菜や果物の名、冠婚葬祭の熨斗袋の字、金銭関係、借用書など証文の書き方、手紙文の見本など実生活にすぐ役に立つ手本が続きます。その本は瑞梅寺村の直太郎という二〇歳の若者の物です。昔の人は凶のような崩し字を習っていたのです。



上段文字

博多、箱崎、幸府、宝満

下段文字左

五両、右之金子、たしかに、受け取り申

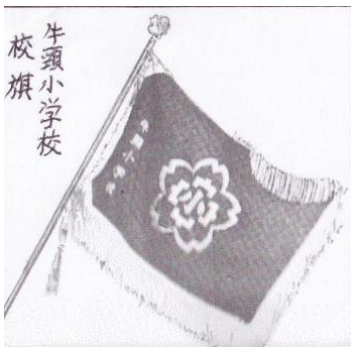
第七十二回 牛頸の学校 その二

明けましておめでとうございます。スエちゃんの話は六年目に突入！「話題がそろそろネタ切れ」というのが皆さんも分かりますよね。でも何とかほじくり出して頑張りまっしょうあと一年。

さて寺小屋のあと明治十一年（1874・明治七年とも）平野神社北側（現ゲートボール場）に牛頸下等小学校が開校しました。下等と言ってもレベルが低いという事ではなくて、明治五年制定の学制による六〜九歳、四年制の学校です。最初の校長兼教諭は竹田定猗、男子十九名、女子二名。当時牛頸村は戸数120、人口600名ほどです。当時の教科書が残ってあればいいのですが。明治十三年に牛頸小学校となり、続いて牛頸尋常小学校と変わり、同二十六年には第三大野尋常小学校となり、校舎手狭となってお宮の南側（現駐車場？）に移りました。同三十三年第二大野尋常小学校に。同四十年義務教育六年となり、同四十二年（1909）またまた人口増のため寺山（現さくら公園）に移転。その後牛頸尋常小学校に戻りました。昭和十六年十二月第二次世界大戦勃発後に牛頸国民小学校。大戦終了後、昭和二十二年に大野村立牛頸小学校に（この年大野中学校創設）六・三・三・四の教育制度となりました。昭和四十三年に南ヶ丘団地の造成が始まり、翌四十四年には南ヶ丘からの児童の転入が始まります。児童数の急増によって四十六年三月牛頸小学校は閉校されました。



初代校長 竹田定猗

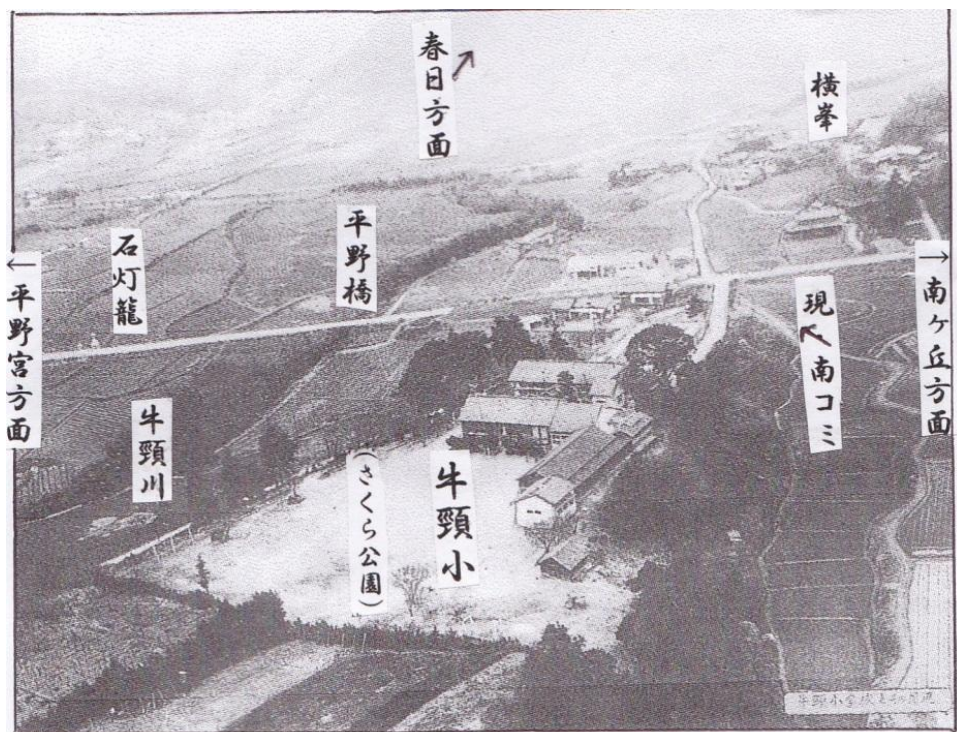


丘からの児童の転入が始まります。児童数の急増によって四十六年三月牛頸小学校は閉校されました。

第七十三回 牛頸の学校 その三

昭和四十六年四月、南ヶ丘に大野南小学校が開校。五十一年には大利中学校が出来て大利小と大野南の卒業生が通学開始。更に五十二年（1977）牛頸区横峰の丘に平野小学校が開校し、牛頸区在住の四百七十余名が南小から入りました。平野小開設の時「牛頸小」にする声も挙がったのですが、結局「平野」の名を採るようになりました。五十六年には上牛頸ハセムシに平野中学校が開校して大利中へ通っていた生徒が入校しました。そして平成七年に月の浦区が分区、翌八年月の浦小学校が開校して月の浦区と平野台区の計七十七名が入り、平野小の生徒はかなり減りました。このようにお宮のそ

ばに始まった小学校は四回移転し九回も校名が変わるといふ紆余曲折の道を辿りました。私は終戦の翌年に先祖の地、牛頸に住み付いたので牛頸の学校には通っていません。牛頸小学校の思い出話は「牛頸郷土史」に詳しく懐かしく面白く載っています。



牛頸小学校とその周辺 (昭和36年3月)

第七十四回 牛頸の民話 その一

さて、スエちゃんの話も終盤に入ります。民話は、民間に伝わる口承文化で牛頸にも七話位ありますので順次ご紹介します。その多くは昨年亡くなられた雑餉隈の郷土史家赤司岩雄先生、横峰の故田中好美先生が取材されてまとめられたものです。

その一、**天狗の鞍掛けの松** 牛頸村の入り口、今の南ヶ丘四ツ角の少し手前の上が平らな大きな松があつてそこにお酒好きでいたずらの天狗さんがいました。天狗さんは村に入る悪人や病氣を見張っていてくれました。ある日、二日市の結婚式に行つてお酒に酔っぱらった若者が通りかかると、何とそこに

見たこともない川が流れていました。若者は、お土産と着物を頭にくくりつけてザブザブと川を泳ぎ始めました。もうすぐ向こう岸へ着こうとした時、「もしもしあんた何ばしよんしゃるとな？」という声に我にかえると若者はやぶのなかでバタバタ手足を動かしていました。天狗にだまされたのです。

また別の日、二日市で温泉に行ったお年寄りが松の木の下までくると、そこに湯気を立てたお風呂がありました。お年寄りは早速着物を脱いでお土産を置いて入りました。「うわあ、よか温泉じゃ、牛頸温泉バイ」。通る人は皆鼻をつまんで笑っています。お年寄りが入っていたのは、畑のドンガメ（肥えだめ、野つぼ）だったのです。さっきの若者もお年寄りもお土産がなくなっていました。二人共天狗さんに化かされたのです。

またある時、馬に乗った役人の侍が牛頸村の稲の出来具合を調べに来ました。天狗さんが「えいッ！」という侍はコロリと馬から落ちました。もう一度「えい！」という、今度は馬の鞍がスルスルと舞い上がって松の梢にストンと乗りました。天狗さんは鞍にまたがって大喜びです。侍は怒って天狗に切りつけましたがガツンと刀を折られました。侍がびっくりしていると空が急に黒くなつて雨風がひどい大嵐になり雷も光りました。そして雲の間から天狗の顔がのぞいて「アッハッハッハッ」と大声で笑いました。侍は気を失いました。

又、サナボリのために村のお母さんたちが二日市へ酒や肴さかなを買いに行った帰り、松の下を通って家に帰ると手には何も持っていません。皆で松の所まで戻ると酒瓶びんや肴の箱がちゃんと並べてありました。

又ある日村人が松の下を通りかかると「おいおい酒ば少し買ってこい」と天狗から頼まれました。村人が酒を持っていくと翌朝、田んぼには水がいっぱい張られアゼの草もきれいに刈ってありました。天狗さんがお礼をしたのです。ね。

第七十五回 牛頸の民話 その二

底なし沼の人柱 平野小と消防署の間にイガイ牟田池という草だらけの池があります。昔、池の北端を大宰府参りの道が通っていました。村人はその道がいつも池へ沈むので困っていました。今日も沢山の村人が出て道の工事をしていましたが何度作っても道はすぐズブズブになります。村人は皆困って座りこんでいると可愛い巡礼娘がやって来て、「皆さんお困りのようですね、私がお手伝いします」と言って池の中へどんどん入って見えなくなりました。すると沈んでいた道が、立派な道になって、工事はすぐに完成しました。村人は皆手を合わせて娘の方を見て拝みました。昔から16才の娘が難工事の人柱にな

ると工事はうまくはかどると言われています。村人たちは花無尾の六地藏の所に祠を建てて娘さんを供養しました。今ではその祠はよく分かりません。

第七十六回 牛頸の民話 その三

刀すぎ池 今はまだありませんが大宰府市との境の平田バス停からつづじヶ丘に少し入った所に小さな池があつて、いつも水が赤かつたそうです。昔、大宰府参りの旅人をおそつて金や物を奪いとる山賊がいて、人を切つた血刀を洗つていたので池の水がいつも赤かつたといいますが、これは鉄分のせいとか、粘土のせいだと思ひます。山賊たちは色んな悪いことをしていましたが、ある日、峠の近くで平田川に落ちたお年寄りを助けてから悪いことをしなくなり橋にらんかんを作つたり村人の畑の手伝いをするようになりました。

第七十七回 牛頸の民話 その四

次郎太郎の松 昔、畑ヶ坂に太郎と次郎という兄弟がいました。その兄弟が同時に隣村のお由よという娘を好きになりました。お由は優しい太郎が好きでしたが、乱暴な次郎はお由に「俺の嫁さんになってくれ」といつも迫つていました。困つたお由は或る時「次郎さん、今晚観音様のお堂で太郎さんと会うのでその時お話をしましょう」と言ひました。その夜次郎がお堂に行くつと、やがて人が来ました。次郎は兄の太郎さえ居なければ、と思つて持つていた短刀でその人に体当たりして刺しました。相手は倒れましたがやがて月の光にその人を見ると、なんと倒れているのはお由よだったのです。お由は、わざと太郎の姿をして現れたのです。次郎は「お由、俺が悪かつた、許してくれ」と泣きました。そして太郎と一緒に丘に墓を作つてお由の供養をし、二本の松を植えました。その松は大きくなつて戦時中戦闘機の潤滑油にするため伐られましたが大ききいのでその俣またにされ、その内腐つてしまいました。二代目の松も大きくなりましたが、家を建てるために伐られて、今ではどこにあつたのかも分かりません。多分葬儀社と料亭大草の間にあつたと思ひます。

第七十八回 牛頸の民話 その五

深さを測れない底なし沼 平野小そばのイガイ牟田池の話です。ある時牛頸村の伊三郎いさぶろうが天狗の松の下を通りかかると、上から天狗が「おい、伊三郎よ、イ



ガイ牟田の深さば測ってみんか、誰も測れんごと深かぞ」と言われ、伊三郎は「ようし、わしが測っちゃう」と家の近くの竹を切って三尺三寸の竹のホコ（槍みたいなもの）を百本作って池へ持って行き測り始めましたが百本目のホコもズブズブと池の中へ沈みました。

伊三郎は「わあ、こりやすごか底なし沼じゃ」とあきらめて家に帰りました。その後、その場所を「ホコたて」と呼ぶようになり、そのあとは「ホコデ」と地名が変わりました。イガイ牟田池の南の端のあたりです。

第七十九回 牛頸の民話 その六

沼から運ばれてきたキセル



昔、山田村のお百姓さんの与八さんが牛馬の餌にする草をとり、イガイ牟田池の近くへやってきました。草を刈り終わって池のそばで煙草をのもうと大事なキセルを取り出しているとポチャンとキセルを池の中へ落してしまいました。キセルはたちまち池の底へ消えました。

与八さんはがっかりして帰りましたが、半年ほどして家の井戸さらえをしていると、底の方で何かきらりと光るものを見つけ拾い上げると、何と、失ったキセルだったので。与八さんは大喜びして皆に言いました。「牛頸のイガイ牟田池と、うちの井戸は続いとるとバイ」と。

案外、本当に水脈がつながっているかも知れませんか。

第八十回 牛頸の民話 その七

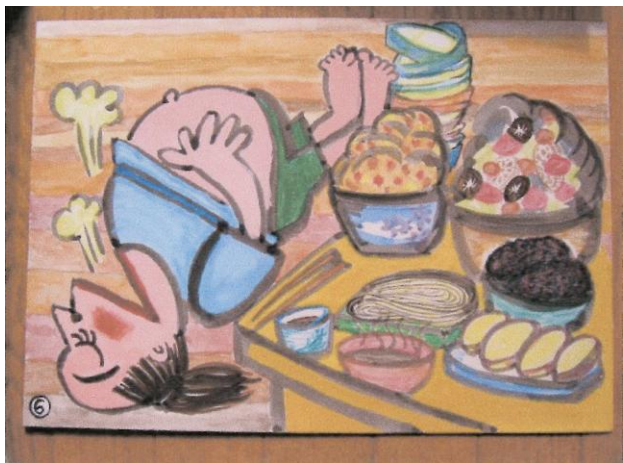
盆だご

畑ヶ坂の与吉はお盆近くになってお母さんの里へお墓参りに行くことになりました。山を三つ、峠を三つ越え、田んぼを通っておばあさんの家に行くとおばあさんは大喜びで墓参りから帰って来た与吉にご馳走を出してくれまし

た。その中に与吉が初めて食べた美味しい団子がありました。おばあさんに「あのだごは何ていうとな？」と聞くと「ああ、あれは「盆だご」タイ」と教わりました。与吉は家に帰ってそれを嫁さんに作ってもらおうと、忘れないように「盆だご盆だごだごだご盆だご」と大声で走りましたが、小川を飛び越える時、思わず「ドッコイショ」と言いました。

それからは「ドッコイショドッコイショ」
に変わってしまいました。与吉は家に着くな
り嫁さんに「おい、ドッコイショばすぐ作
っちゃんない」と頼みました。

嫁さんは「ドッコイショでなんね、どげん
とね？」と言いましたが「ええい、ほらあ
れたい、白かとに黒かとがベタバタついと
るあれたい」それでも嫁さんは分りません。
とうとう与吉は怒って嫁さんの頭を叩きま
した。「あれ、あんた何すると？こげなだご
のごたるコブが出来たが」と怒ると与吉は
「そうそれたい、盆だごたい、早よ作って！」
と嫁さんに言いました。



第八十一回 私の思い出 その一

私、竹田は終戦の翌年牛頸へ移り住みました。中学一年生でした。

毎日薄暗い内に家を出て博多方面へ向かう人と連れだつて国鉄水城駅や西鉄下大利駅へ向かいました。帰りは時には真つ暗な道を歩きました。街灯も家もありませんが花崗岩の砂道は白くて難なく歩きました。その頃は自転車はおろか人も車も全く通りません。今の南ヶ丘四つ角の所に来ると、いつも狐がコーンコン、ギヤーツと鳴いて、ビクビクして歩きました。天狗の松の前を小走りキリドオンに通リ、切り通し（今の銀ずしの辺）を抜けると牛頸の家の灯が見えて、ホツとしたものです。南ヶ丘四つ角の所は昭和38年頃までは立派な三差路で高い崖が通せんぼうをしていました。そこには「真奈井ヶ滝道」の大きな石標がありました。が造成工事の時に紛失しました。そして今のアシユランのところは小高い丘で、右の方平野小へ大宰府参りの旧道が伸びていて、よく近道をして帰りましたが、イガイ牟田池の辺は道が狭くて心細かったです。花無尾ケナシオの六地藏の前から牛頸川へと下り、川に沿って堂の本の我が家へと帰りました。中学生の足で駅から約50分でした。

第八十二回 私の思い出 その二

平野宮の手前の平野橋のすぐ下流にはゴウの木の水車があつて、いつもゴットンゴットンと米や麦をついていました。

所で昔の町内清掃（今のクリーンシティ大野城）は凹凸道を直し、道におおいかぶさった木や藪を払って一日がかりでした。終ったら皆で芋なべを囲み、大人は酒を飲みました。溝さらえの時は今の浄水場の所から作業を始め、のむら整形の辺までで大作業でした。中学生の私も出ました。その頃は無断で休むと

「出不足賃」でぶそくちんを幾らかとられました。

その頃の夏の夜空は家の灯が少ないので空には一面の星や天の川がはつきりと見られました。春は菜の花と麦畑がパッチワークみたいで見事でした。田に水を入れる頃は蛙の音がうるさい程でしたし、蛍もあちこち飛んでいました。小川ではドジョウやウナギもとれましたしツガニもたまに掴まえました。秋には田んぼの蝗いなごをとつて、佃煮にして食べました。



第八十三回 私の思い出 その三

牛頸川ではドンポ、カマツカ、もとれました。一方、平野台の山ではナバ（きのこ）もよくとれました。ハツタケ、アマタケ、シメジ、マツタケ、などです。今ではもう想像もつきませんね。平野宮では時々芝居がかかり、野外映画会も楽しみなものでした。変わった思い出では、私の家の前の農道でおばあちゃん達の連れしよん（立ち小便）も見られました。それから今皆さんは「牛頸はよくなった」とよく言われますが、私は逆に「悪くなった」と思います。たしかに生活環境は整いましたが、田や畑、山はつぶされ、あの自然豊かな牛頸はその辺の町と同じになりはてました。もうこれ以上変わらないことを祈ります。

長い間ご愛読ありがとうございました。

平成二十五年十二月

竹田 準



スエちゃんのつぶやき (平成二十六年一月)

明けましておめでとございます

昨年12月号でスエちゃんの牛頸ばなしを終わりました。7年少し連載しましたが、牛頸区の皆さんご愛読ありがとうございました。色々と激励のお言葉など頂いて楽しく書かせて頂きました。なお、「牛頸郷土史」も一度ご覧下さい。牛頸のことがより詳しく解りますよ。スエちゃんも年とつてくたぶれましたが、またいつか誌上でお目にかかりたいと思います

竹田 準